

観音前遺跡第47地点

発掘調査報告書



2018

富士見市遺跡調査会

田中峰雄

富士見市遺跡調査会調査報告 第73集

観音前遺跡第47地点 発掘調査報告書

発行 平成30年3月31日

編集発行 富士見市遺跡調査会
〒354-0021 埼玉県富士見市大字鶴馬1873-1

印刷 株式会社 白峰社
〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-49-6

あ い さ つ

埼玉県富士見市は、都心から約30kmのベッドタウンとして開発される一方、今なお「武蔵野」の面影も残り、緑豊かな自然環境とバランスのとれた街に発展してきました。

富士見市は武蔵野台地の北東縁辺部に位置しており、市域は西部の武蔵野台地、東部の荒川低地とに分かれています。台地と低地の境界部は、台地際の湧水と小河川の影響で複雑な地形が造り出されていますが、緑豊かな環境も育んできました。この豊かな自然の中、先史時代から続く人々の営みの痕跡が、貴重な埋蔵文化財として今もなお残されており、水子貝塚（国指定史跡）、難波田氏館跡（県指定旧跡）、打越遺跡、南通遺跡などの著名な遺跡が存在しています。

富士見市遺跡調査会では、埋蔵文化財包蔵地における開発行為に先立ち、市教育委員会の指導の下、記録保存を目的とした発掘調査を行ってきました。今回報告する観音前遺跡第47地点は、市教育委員会の斡旋により当調査会が主体となって、平成28年12月より発掘調査を実施したものです。

観音前遺跡は北東部に荒川低地を臨む武蔵野台地縁辺部に位置し、北西部で東前遺跡、南西部で神明遺跡と隣接しています。これまでの調査で、弥生時代や古墳時代を中心とした遺構が確認されていました。

今回の第47地点は分譲住宅の建設に伴う調査であり、事業対象地は遺跡東部に位置しています。今回の調査により観音前遺跡の様相について多くの知見を得ることができました。

ここにその成果を報告書として刊行するにあたり、田中峰雄氏をはじめとして、ご指導、ご協力を賜りました文化庁、埼玉県教育局生涯学習文化財課、富士見市教育委員会並びに地元の住民のみなさま、関係各位に厚く御礼申し上げます。

本書が、広く一般の方々にも活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める上で参考になれば幸いに存じます。

富士見市遺跡調査会

会 長 山 口 武 士

例 言

1. 本書は埼玉県富士見市大字水子字城ノ下3063-1、3063-2に所在する観音前遺跡第47地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は分譲住宅の建設に伴う記録保存調査で、富士見市教育委員会の斡旋により、田中峰雄氏が発掘調査を富士見市遺跡調査会に委託して実施した。
3. 発掘調査は平成28年12月19日～平成29年1月24日、整理調査は平成29年9月1日～10月31日まで行った。
4. 調査組織は以下のとおりである。

会 長	森元 州（富士見市教育委員会教育長） （平成29年3月31日まで） 山口武士（富士見市教育委員会教育長） （平成29年4月1日から）
副 会 長	木村久志（富士見市教育委員会教育部長）
理 事	松本伸行（富士見市文化財審議会委員） 会田 明（元富士見市教育委員会） 磯谷雅之（富士見市財政課長）
監 事	塩入たま江（富士見市文化財審議会委員） 永瀬昭次（富士見市出納室長）
事 務 局 長	鳥海謙一（富士見市生涯学習課長）
事務局次長	和田晋治（富士見市生涯学習副課長）
事 務 局 員	堀 善之（富士見市生涯学習課） 佐藤一也（富士見市生涯学習課）
調査担当者	堀 善之・佐藤一也
5. 発掘調査及び本書の作成・編集は富士見市遺跡調査会が行い、佐藤が担当した。
6. 本書の遺構及び遺物挿図の指示は以下のとおりである。

（1）図版の縮尺は主に次のとおりである。

遺構配置図	1/300
住居跡・溝状遺構	1/60
不明遺構・火葬墓・溝跡	1/60
炉跡・カマド	1/30
土器実測図	1/4
土器拓影図・石器実測図	1/3

（2）遺構実測図の水糸高は海拔高を示す。

（3）柱穴内の数字は床面からの深度を示す（cm）。

（4）住居跡名・溝状遺構名・不明遺構名・火葬墓名は、時代ごとに、遺跡内の通し番号になっている。

（5）遺構名の略記号は以下の内容を示す。

H = 古墳時代・平安時代の住居跡、K = 火葬墓、M = 溝跡、Y = 弥生時代後期～古墳時代初頭の住居跡

7. 本報告にかかる出土品及び記録図面・写真等は一括して富士見市文化財整理室に保管してある。
8. 発掘調査及び整理を通じて下記の諸機関・諸氏に御指導・御協力を賜った。（敬称略）
荒井幹夫・越前谷理・岡崎裕子・岡野賢人
加藤秀之・隈本健介・小出輝雄・鈴木一郎
高崎直成・坪田幹男・照林敏郎・鍋島直久
根本 靖・野沢 均・早坂廣人・松本富雄
柳井章宏・柳沢健司
文化庁・埼玉県教育局生涯学習文化財課
富士見市立水子貝塚資料館
富士見市立難波田城資料館
9. 調査参加者
（調査員）
櫻井英史
（調査協力員）
飯田久子・大川早苗・小口 広・神谷道子
向後洋史・白石尚美・鈴木美恵子・中川和弘
名久井よし江・長谷川雅之・深谷和江・本山真理子
盛政清美・山口好文・吉田信江
（整理協力員）
和泉千珠子・伊藤幸子・小川千鶴子・今野孝之
萩元智子・細見美枝・結城路子
10. 本書の作成にあたり、特に古墳時代の遺物年代決定については、志木市教育委員会生涯学習課の尾形則敏氏、同じく大久保聡氏に御指導いただいた。ここに感謝申し上げたい。

目 次

あいさつ
例 言
目 次
図表目次
写真図版目次

第 1 章	発掘調査の経過	1
第 1 節	発掘調査に至る経緯	1
第 2 節	発掘調査の経過	2
第 3 節	遺跡の立地と環境	2
第 2 章	発見された遺構と遺物	3
第 1 節	弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構と遺物	3
第 2 節	古墳時代の遺構と遺物	12
第 3 節	平安時代の遺構と遺物	22
第 4 節	その他の遺構と遺物	23
第 3 章	調査のまとめ	27

写真図版
報告書抄録

図 表 目 次

第1図	富士見市内遺跡分布図		第20図	第31号住居跡出土遺物3（31 H）	18
第2図	観音前遺跡第47地点	1	第21図	第1号溝状遺構	20
第3図	観音前遺跡第47地点遺構配置図	2	第22図	第1号溝状遺構出土遺物	21
第4図	第39号住居跡（39 Y）	3	第23図	第30号住居跡出土遺物（30 H）	22
第5図	第40号住居跡（40 Y）	4	第24図	第30号住居跡（30 H）	23
第6図	第40号住居跡出土遺物（40 Y）	5	第25図	第1号火葬墓（1 K）	24
第7図	第41号住居跡（41 Y）	5	第26図	第21号溝跡（21 M）	25
第8図	第42号住居跡（42 Y）	6	第27図	第22号溝跡（22 M）	26
第9図	第43号住居跡（43 Y）	7	第28図	遺構外出土遺物	26
第10図	第44号住居跡（44 Y）	8			
第11図	第43・44号住居跡出土遺物 （43 Y・44 Y）	9	第1表	第40号住居跡出土土器観察表	4
第12図	第45号住居跡（45 Y）	10	第2表	第43号住居跡出土土器観察表	9
第13図	第1号不明遺構	11	第3表	第44号住居跡出土土器観察表	9
第14図	第1号不明遺構出土遺物	12	第4表	第1号不明遺構出土土器観察表	12
第15図	第31号住居跡1（31 H）	13	第5表	第31号住居跡出土土器観察表1	18
第16図	第31号住居跡2（31 H）	14	第6表	第31号住居跡出土土器観察表2	19
第17図	第31号住居跡3（31 H）	15	第7表	第1号溝状遺構出土土器観察表1	21
第18図	第31号住居跡出土遺物1（31 H）	16	第8表	第1号溝状遺構出土土器観察表2	22
第19図	第31号住居跡出土遺物2（31 H）	17	第9表	第1号溝状遺構出土石器観察表	22
			第10表	第30号出土土器観察表	22
			第11表	遺構外出土土器観察表	24

写真図版目次

写真図版 1

- 〔1〕 第39号住居跡完掘状況（39 Y）
- 〔2〕 第40号住居跡遺物出土状況 1（40 Y）
- 〔3〕 第40号住居跡遺物出土状況 2（40 Y）
- 〔4〕 第40号住居跡完掘状況（40 Y）
- 〔5〕 第42号住居跡完掘状況（42 Y）
- 〔6〕 第43号住居跡炭化材・焼土塊検出状況（43 Y）
- 〔7〕 第43号住居跡完掘状況（43 Y）
- 〔8〕 第44号住居跡完掘状況（44 Y）

写真図版 2

- 〔1〕 第44号住居跡炉跡覆土堆積状況（44 Y）
- 〔2〕 第44号住居跡炉跡完掘状況 1（44 Y）
- 〔3〕 第44号住居跡炉跡完掘状況 2（44 Y）
- 〔4〕 第45号住居跡完掘状況（45 Y）
- 〔5〕 第1号不明遺構遺物出土状況
- 〔6〕 第1号溝状遺構完掘状況
- 〔7〕 第1号溝状遺構遺物出土状況 1
- 〔8〕 第1号溝状遺構遺物出土状況 2

写真図版 3

- 〔1〕 第30号住居跡完掘状況（30 H）
- 〔2〕 第31号住居跡遺物出土状況 1（31 H）
- 〔3〕 第31号住居跡遺物出土状況 2（31 H）
- 〔4〕 第31号住居跡遺物出土状況 3（31 H）
- 〔5〕 第31号住居跡遺物出土状況 4（31 H）
- 〔6〕 第31号住居跡完掘状況（31 H）
- 〔7〕 第31号住居跡カマド完掘状況（31 H）
- 〔8〕 第1号火葬墓炭化材・焼土塊・骨粉検出状況（1 K）

写真図版 4

- 〔1〕 第40号住居跡出土遺物（40 Y）（No.1）
- 〔2〕 第1号溝状遺構出土遺物（No.1）
- 〔3〕 第1号溝状遺構出土遺物（No.2）
- 〔4〕 第1号溝状遺構出土遺物（No.3）
- 〔5〕 第1号溝状遺構出土遺物（No.4）

写真図版 5

- 〔1〕 第1号溝状遺構出土遺物（No.5）
- 〔2〕 第1号溝状遺構出土遺物（No.6）
- 〔3〕 第1号溝状遺構出土遺物（No.7）
- 〔4〕 第1号溝状遺構出土遺物（No.8）
- 〔5〕 第1号溝状遺構出土遺物（No.9）
- 〔6〕 第31号住居跡（31 H）（No.2）
- 〔7〕 第31号住居跡（31 H）（No.1）
- 〔8〕 第31号住居跡（31 H）（No.5）

写真図版 6

- 〔1〕 第31号住居跡出土遺物（31 H）（No.7）
- 〔2〕 第31号住居跡出土遺物（31 H）（No.13）
- 〔3〕 第31号住居跡出土遺物（31 H）（No.10）
- 〔4〕 第31号住居跡出土遺物（31 H）（No.20）
- 〔5〕 第31号住居跡出土遺物（31 H）（No.16）
- 〔6〕 第31号住居跡出土遺物（31 H）（No.15）

1 オトウカ山 2 中沢 3 稲荷久保南 4 南武蔵野
 5 稲荷久保北 6 外記塚 7 市街道 8 稲荷前
 9 鍛冶海戸 10 宮廻 11 伊佐島 12- 13 薬師前
 14 西渡戸 15 渡戸 16 東渡戸 17 羽沢 18 上沢
 19 浅間後 20 羽沢前 21 山室 22 大谷 23 山室谷
 24 平塚 25 宮脇 26 黒貝戸 27 折戸 28 宿(多門氏館跡)
 29 殿山 30 谷津 31 御庵 32 新田 33 八ヶ上 34 本目
 35 節沢 36 関沢 37 新開 38 松ノ木 39 打越 40 松山
 41 氷川前 42 水子貝塚 43 東前 44 観音前 45 神明
 46 東台 47 正網 48 正網南 49 栗谷ツ 50 別所
 51 北通 52 南通 53 上内手 54 山形 55 難波田氏館跡
 56 貝塚山 57 西ノ原 58 東久保南 59 山崎 60 権平沢



第1図 富士見市内遺跡分布図 (1/30000)

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯

埼玉県富士見市は、県域南東部、都心から約30km圏内に位置している。面積は約19.7km²、人口11万人を超えている。

富士見市は、東に荒川を挟んでさいたま市、南は柳瀬川を挟んで志木市、北はふじみ野市、西はふじみ野市・三芳町と接する。市域の中央部には荒川支流の新河岸川が南北に貫流し、荒川と新河岸川により形成された標高6m前後の「荒川低地」と呼ばれる沖積地が市域東半部に広がっている。また、市域西半部は武蔵野台地の北東縁部にあたり、標高20m前後を測る。この武蔵野台地の縁辺部には、新河岸川に注ぐ小河川の浸食作用や湧水により、多くの小支谷が形成されており、複雑な地形を呈している。

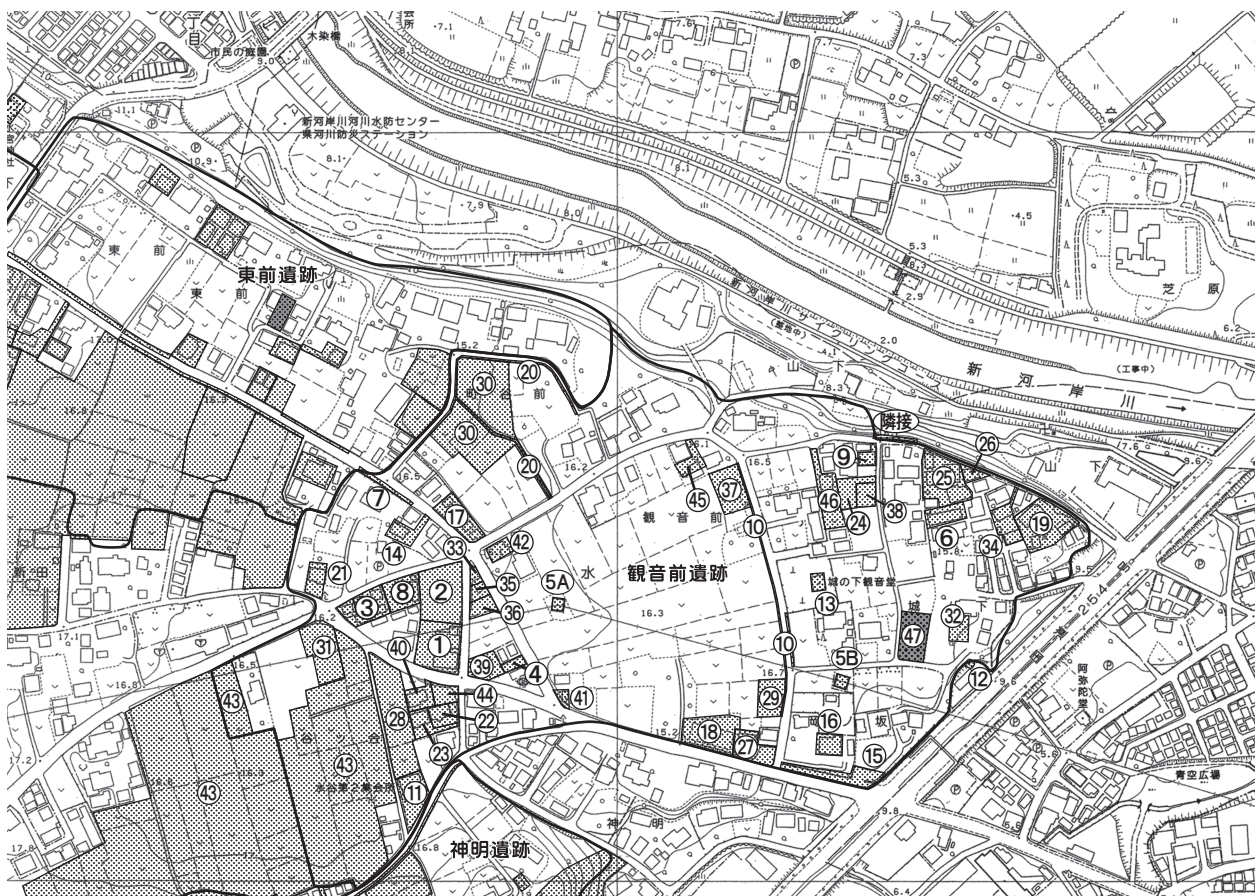
富士見市の遺跡は59カ所を数え、その多くは市域西部の武蔵野台地縁辺部に集中しており、旧石器時代

から江戸時代までの遺跡が確認されている。また市域東部では、新河岸川沿いの自然堤防を中心に4遺跡が確認され、弥生時代後期～古墳時代初頭、中近世の遺跡が確認される。

富士見市では昭和30年代後半頃からベッドタウンとして、東部東上線沿線を中心に急激な宅地等の開発が行われてきたが、駅周辺から離れた地域では畑地がよく残されている状態であった。しかし、平成22年11月、水子地区が市街化区域に再編入されたことに伴い開発が増加し、広大な畑地が残る水子地区に所在する観音前遺跡でも開発行為が増加している。

第47地点は、分譲住宅の建設を目的として、平成28年8月1日に田中峰雄氏より、埋蔵文化財開発行為事前協議書が富士見市教育委員会に提出された。面積は603.11㎡を測る。

富士見市教育委員会では、平成28年8月25～26日に事業予定地内にて試掘調査を行い、その結果、弥生



第2図 観音前遺跡第47地点 (1/5000)

時代後期～古墳時代初頭・古墳時代・平安時代・その他の遺構・遺物が確認された。

市教育委員会による試掘調査の結果を基に、確認された埋蔵文化財の取り扱いについて市教育委員会と事業者・土地所有者との間で、保存方法・調査方法・調査期間・調査経費等について協議を行った結果、記録保存を目的とした発掘調査を実施することになり、調査は富士見市遺跡調査会に幹旋することになった。

富士見市遺跡調査会では、富士見市教育委員会からの幹旋を受け入れ、事業者と当調査会との間で、発掘調査事業についての契約を締結した。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は試掘調査の結果を基に、遺構が確認された部分を中心に、平成28年12月9日から重機を使用して表土除去を行った。

遺構は調査区全面に確認された為、土山確保を目的として、北半部と南半部と分けて調査を実施した。まず北半部から表土除去を行い、39～42 Y、30 H・31 H、第1号不明遺構、第1号溝状遺構、1 K、21 Mを確認した。12月21日から遺構の掘削を行い、平成29年1月12日で北半部の調査を終了した。

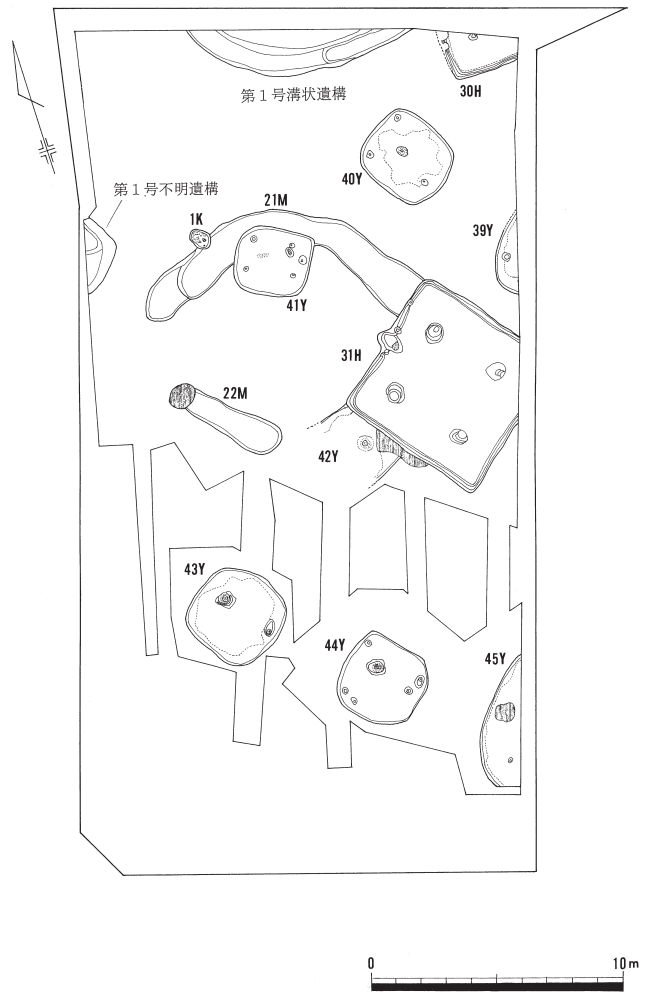
1月16日に反転を行い、南半部の表土除去を行った。43～45 Y、22 Mを確認し、1月18日から遺構の掘削を行った。その後、1月25日に南半部の調査を終了とし、埋め戻しを行った。

第3節 遺跡の立地と環境

観音前遺跡は、市域南部の水子地区に位置し、武蔵野台地縁辺部に立地している。北東側は新河岸川と荒川低地、南側は柳瀬川と柳瀬川によって開析された支谷を臨み、低地と支谷によって画された支台先端部に立地している。遺跡の北西側で東前遺跡、南西側で神明遺跡とそれぞれ接している。

これまでに46地点の発掘調査が実施され、弥生時代後期～古墳時代初頭と古墳時代後期を中心とした集落跡であることが分かっている。

弥生時代後期～古墳時代初頭において、遺跡中央部の第10地点で、環濠と思われる溝跡と多数の竪穴住居跡が確認され、環濠集落と予想されている。



第3図 観音前遺跡第47地点遺構配置図（1/300）

古墳時代後期では、遺跡南半部で竪穴住居跡が確認されている。

今回の第47地点では、弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓の可能性のある不明遺構や古墳時代後期の古墳と考えられる溝跡が確認されており、当遺跡東部を中心に各時代の墓域が広がっている可能性がある。

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 弥生時代後期～古墳時代 初頭の遺構と遺物

1. 住居跡

第39号住居跡（39Y）（第4図）

[位置] 調査区東部

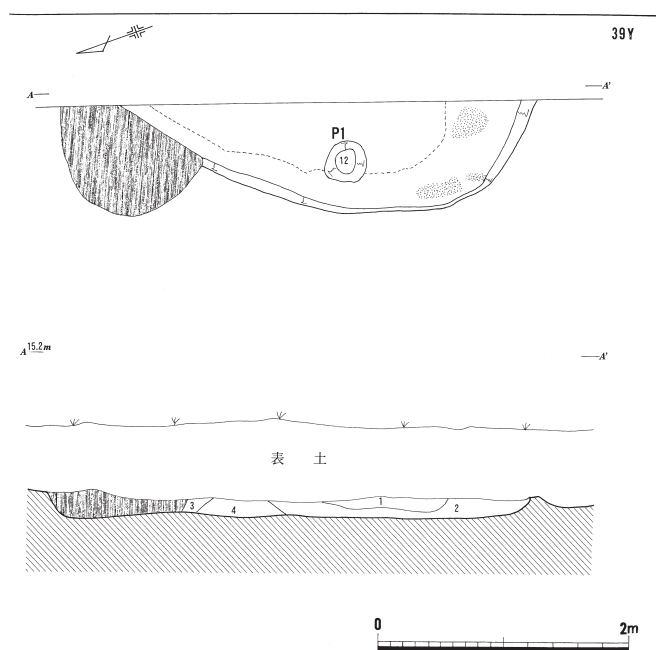
[構造]（平面形）隅丸方形か（規模）長軸3.0m以上
×短軸1.6m以上（主軸方位）N-44°-E（壁高）
床面から5～15cmを測り、やや緩やかに立ち上が

る。（床）平坦で、壁際を除いて硬化範囲を確認し
た。（柱穴）確認された主柱穴はP1で、深さ12cm
を測る。

[覆土] 黒褐色土を基調とし、4層に分層される。

[遺物出土状況] 弥生土器片が覆土中から散在して出
土している。小片の為、図化はできなかった。ま
た、住居跡南西部の覆土中で焼土塊を確認した。

[時期] 弥生時代後期～古墳時代初頭



第39号住居跡（39Y：A-A'）

- | | |
|--------|-------------------------------|
| 1 黒褐色土 | ロームブロックを少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性普通。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒を少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性普通。 |
| 3 黒褐色土 | ロームブロックを中量含む。しまり・粘性普通。 |
| 4 黒褐色土 | ローム粒を少量含む。しまり・粘性普通。 |



第4図 第39号住居跡（39Y）（1/60）

第40号住居跡（40Y）（第5図）

[位置] 調査区北東部

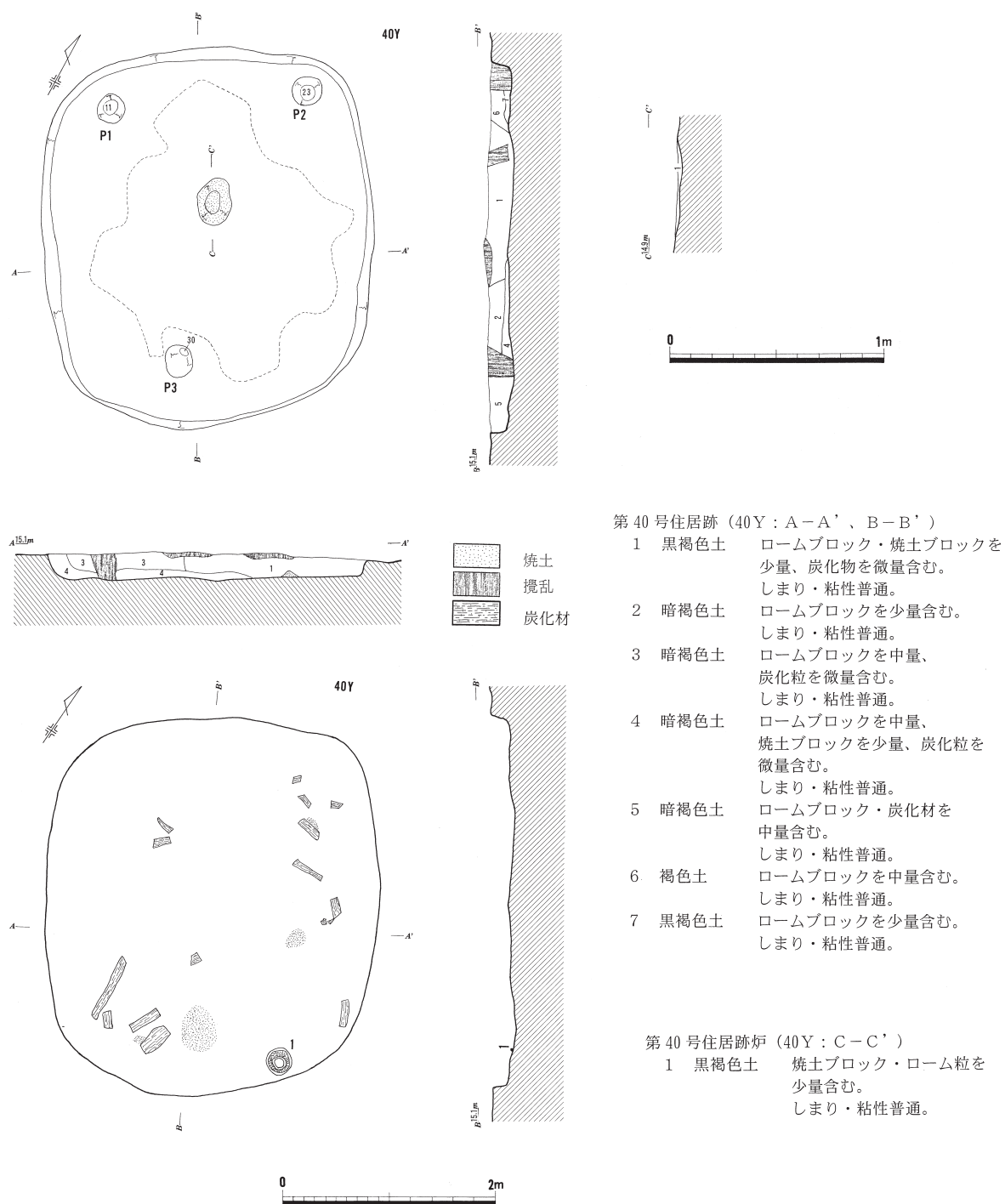
[構造]（平面形）隅丸方形（規模）長軸3.5m×短軸
3.1m（主軸方位）N-33°-W（壁高）床面から
15～26cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。（床）
凹凸があり、壁際及びコーナー部を除いて硬化範囲
を確認した。（炉）地床炉。住居跡中央部に位置す
る。規模は長径43cm×短径35cmの楕円形を呈し、
壁は緩やかに立ち上がる。炉床面は火熱を受けて
赤変硬化している。（柱穴）確認された主柱穴はP
1・P2で、深さ11cm・23cmを測る。P3は出入
り口施設に伴う柱穴で、深さ30cmを測る。

[覆土] 暗褐色土を基調とし、7層に分層される。各
層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積してい
ることから、人為堆積と考えられる。

[遺物出土状況] 弥生土器片が覆土中から散在して出
土している。1は、住居跡南東コーナー部の床面か
ら正位の状態出土した。また、住居跡全体の覆土
中層から下層で炭化材や焼土塊を確認した。

[時期] 弥生時代後期～古墳時代初頭

[備考] 人為堆積と考えられる覆土中層から下層で炭
化材や焼土塊が出土し、床面が焼けていないことか
ら、住居廃絶時の埋め戻し中に家屋等の廃材を燃や
したものと捉えられる。



第5図 第40号住居跡 (40Y) (1/60、1/30)

No.	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考
1	壺	—	6.9	(19.6)	橙褐色	長石 石英 白色粒子	外面：ヘラ磨き RLとLRの単節縄文による羽 状縄文

※ () は現存の規格

第1表 第40号住居跡出土土器観察表



第6図 第40号住居跡出土遺物 (40 Y) (1/4)

第41号住居跡 (41 Y) (第7図)

[位置] 調査区北部

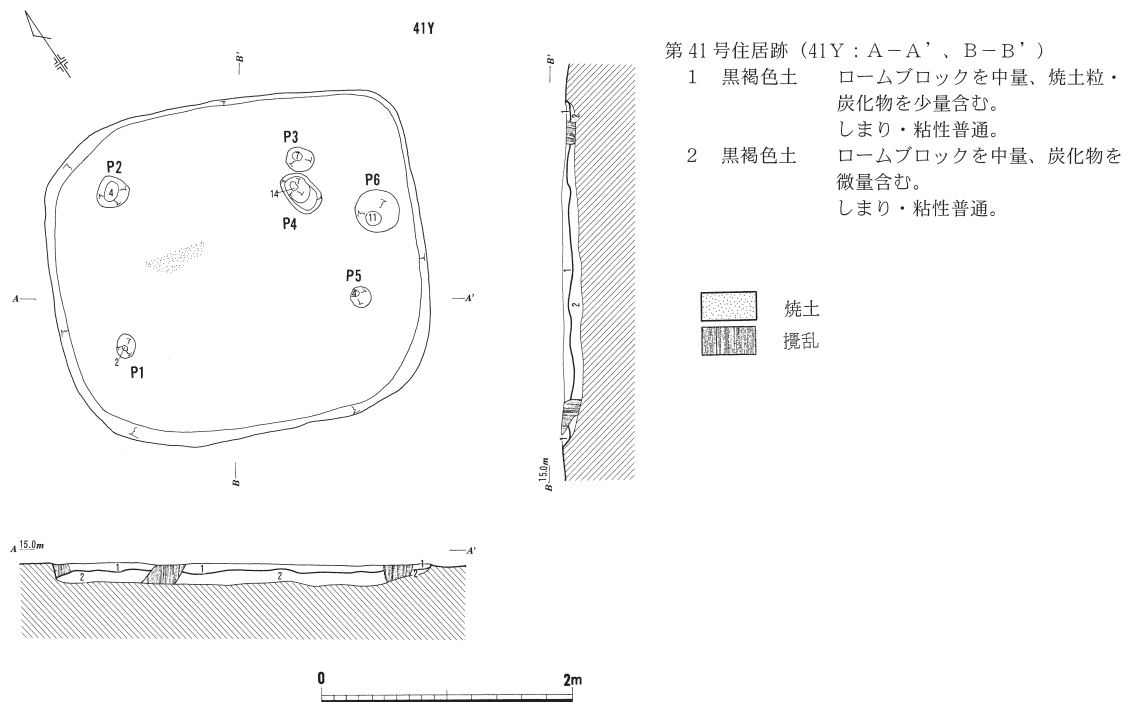
[構造] (平面形) 隅丸方形 (規模) 長軸3.0m×短軸2.7m (主軸方位) N-62°-W (壁高) 床面から約3～7cmを測り、緩やかに立ち上がる。(床) 凹凸がある。黒褐色土の第2層を埋め戻して床を構築している。(炉) 住居跡西部でわずかに焼土粒が散った範囲が認められた。(柱穴) P1～P5は主柱穴と考えられ、深さ2～14cmを測る。P6は出入口施設に伴う柱穴で、深さ11cmを測る。

[覆土] 黒褐色土を基調とした単一層である。

[遺物出土状況] 弥生土器片が覆土中から散在して出土している。小片の為、図化はできなかった。

[時期] 弥生時代後期～古墳時代初頭

[備考] 第21号溝に掘り込まれている。



第7図 第41号住居跡 (41 Y) (1/60)

第42号住居跡（42 Y）（第8図）

〔位置〕 調査区中央部

〔構造〕（平面形）隅丸方形か（規模）長軸1.6 m以上×短軸3.2 m（主軸方位）N - 73° - E（壁高）床面から約7～8 cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。（床）平坦で、壁際を除いて硬化範囲を確認した。（炉）地床炉。規模は径59 cmの円形を呈し、炉

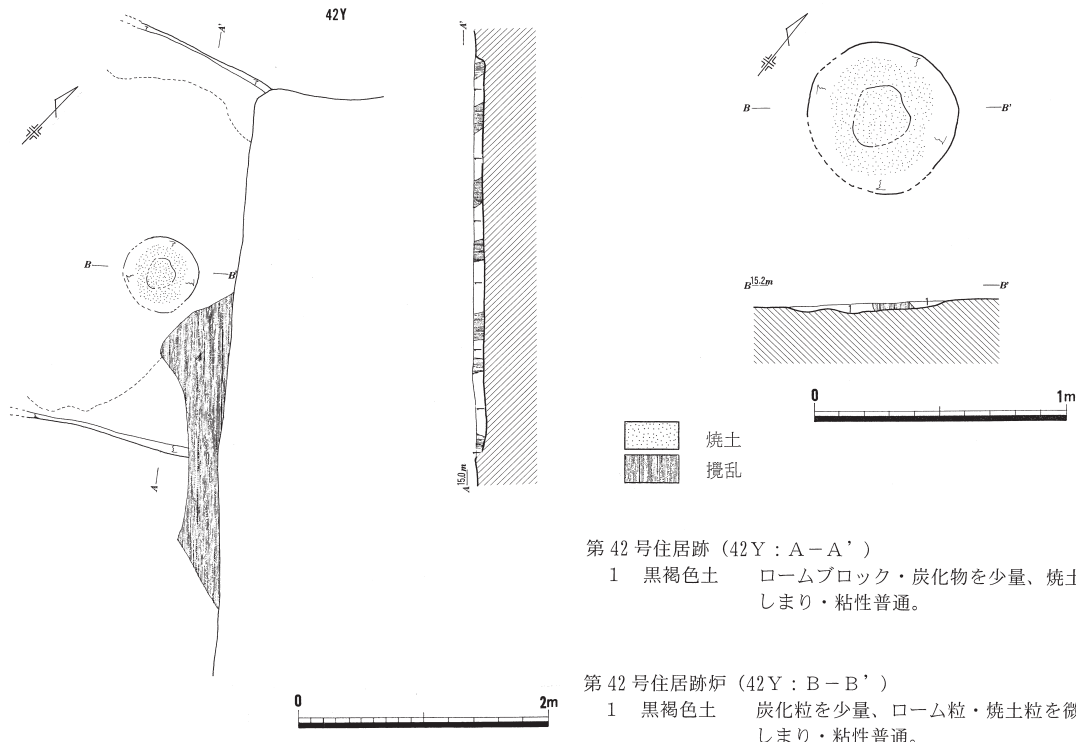
床面から緩やかに立ちあがる。炉床面は被熱を受けて赤変硬化している。

〔覆土〕 黒褐色土を基調とした単一層である。

〔遺物出土状況〕 弥生土器片が覆土中から散在して出土している。小片の為、図化はできなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代初頭

〔備考〕 第31号竪穴住居（31 H）に掘り込まれている。



第42号住居跡（42 Y：A - A'）

- 1 黒褐色土 ロームブロック・炭化物を少量、焼土粒を微量含む。
しまり・粘性普通。

第42号住居跡炉（42 Y：B - B'）

- 1 黒褐色土 炭化粒を少量、ローム粒・焼土粒を微量含む。
しまり・粘性普通。

第8図 第42号住居跡（42 Y）（1/60、1/30）

第43号住居跡（43 Y）（第9図）

〔位置〕 調査区南西部

〔構造〕（平面形）隅丸方形（規模）長軸3.6 m×短軸3.5 m（主軸方位）N - 35° - W（壁高）床面から25～30 cmを測り、やや緩やかまたはほぼ垂直に立ち上がる。（床）平坦で、壁際及びコーナー部を除いて硬化範囲を確認した。（炉）火皿式。住居跡北西部に位置する。規模は長径125 cm×短径116 cmの楕円形を呈する。楕円形に掘り込んだ部分に第2～4層の黒褐～橙色土を埋め戻し、南東半部の炉床面に粘土塊を貼り付けている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。（貯蔵穴）住居跡南東部壁際に位置する。規模は長径72 cm×短径42 cmの楕円

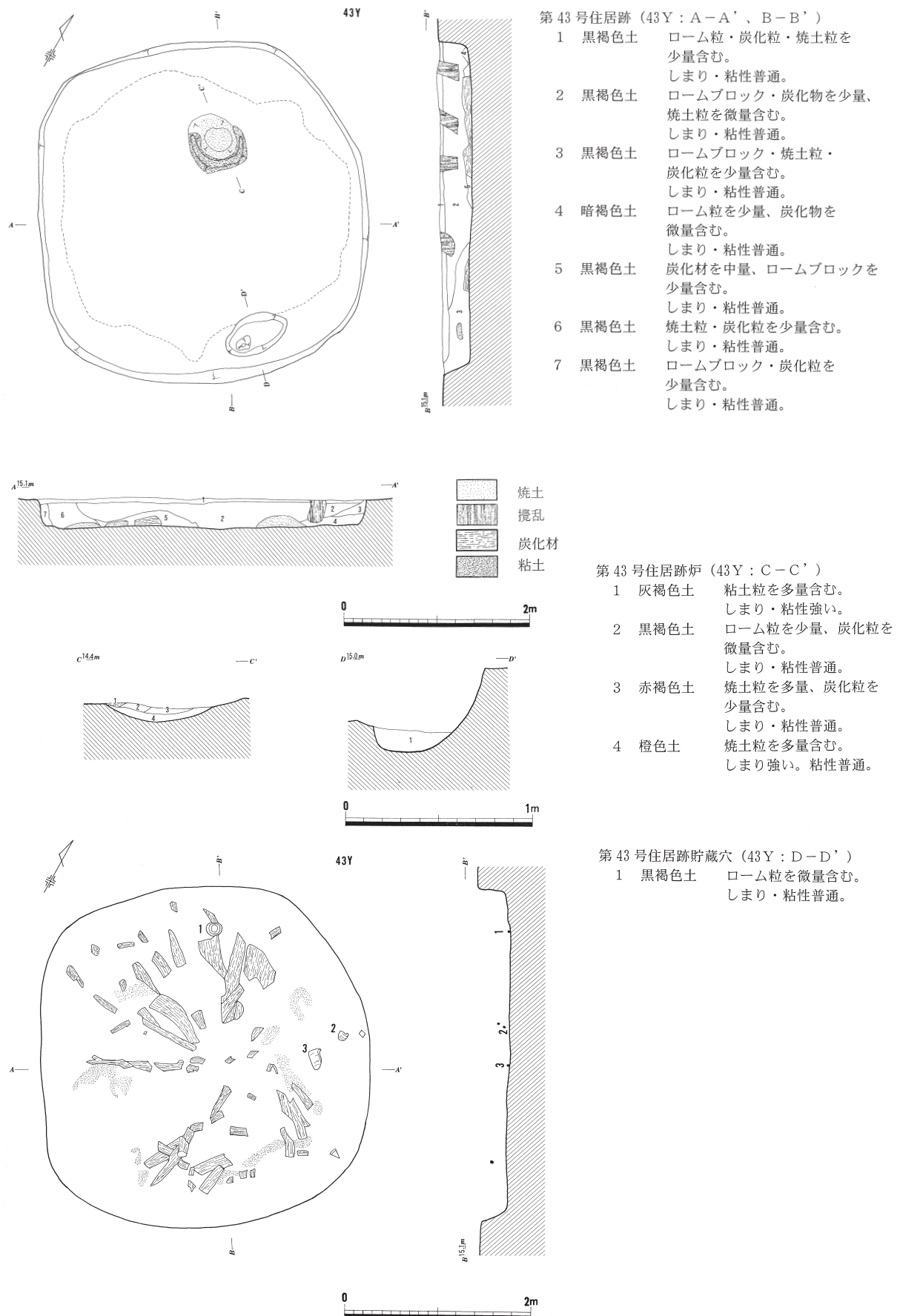
形を呈し、床面から深さ15 cmを測る。底面の南部にピット状の掘り込みが確認される。

〔覆土〕 黒褐色を基調とし、7層に分層される。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

〔遺物出土状況〕 住居跡全体の覆土中層から下層で弥生土器片が散在して出土した。また、住居跡全体の覆土中層から下層で炭化材や焼土塊を確認した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代初頭

〔備考〕 人為堆積と考えられる覆土中層から下層で炭化材や焼土塊が出土し、床面が焼けていないことから、住居廃絶後の埋め戻し中に家屋等の廃材を燃やしたものと捉えられる。



第9図 第43号住居跡 (43Y) (1/60、1/30)

第44号住居跡（44 Y）（第10図）

〔位置〕 調査区南部

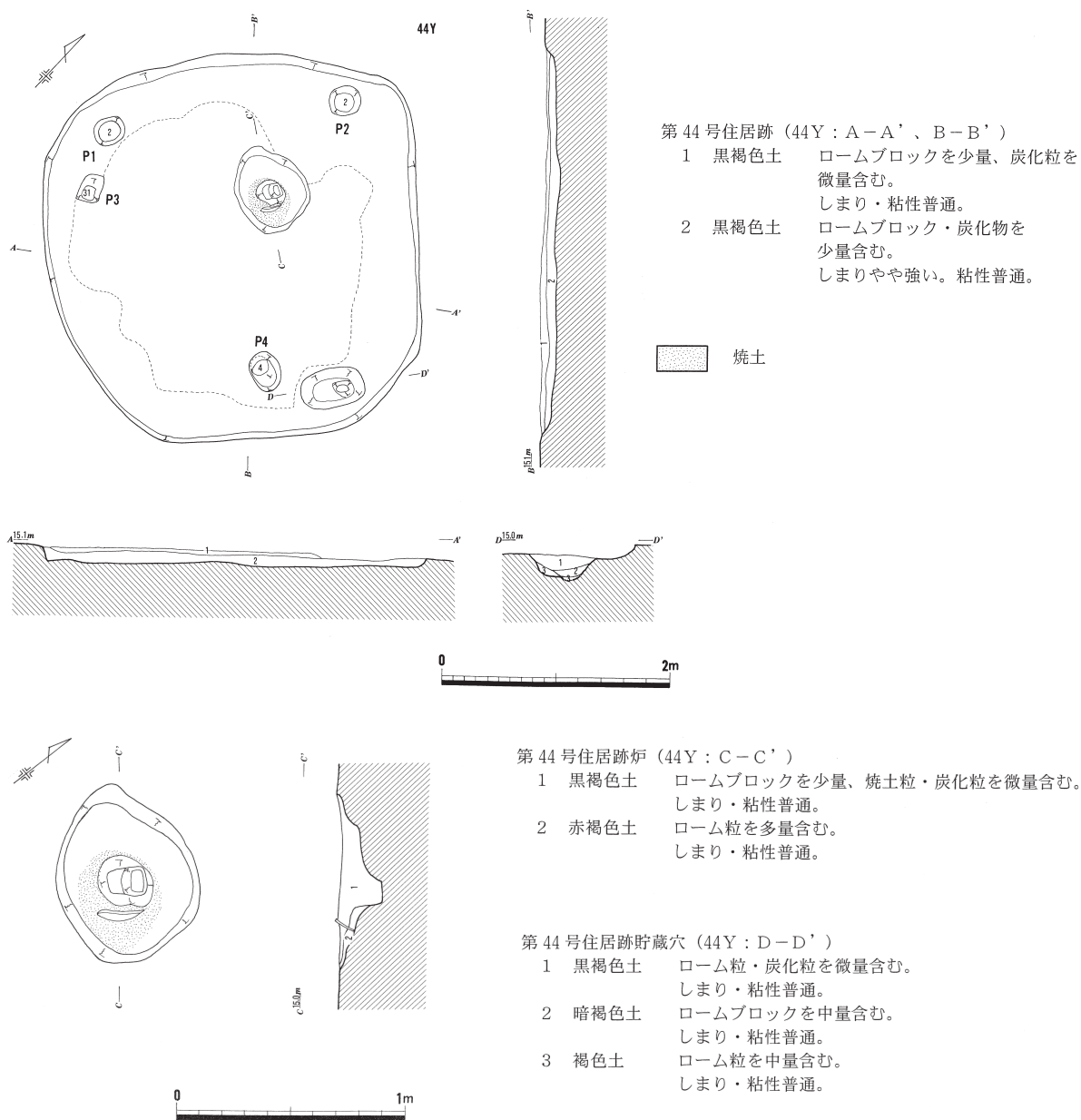
〔構造〕（平面形）隅丸方形（規模）長軸3.5m×短軸3.4m（主軸方位）N-50°-W（壁高）床面から7～14cmを測り、緩やかに立ち上がる。（床）やや凹凸があり、壁際及びコーナー部を除いて硬化範囲を確認した。（炉）地床炉。住居跡中央部北寄りに位置する。規模は長径78cm×短径62cmの楕円形を呈し、炉床面から緩やかに立ち上がる。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉跡中央部に甕の胴部片が立てられ、その内側に煮炊き用の土器を固定し

と思われるピット状の掘り込みを確認した。（貯蔵穴）住居跡東部コーナー部に位置する。規模は長軸58cm×短軸35cmの隅丸方形を呈し、床面から深さ23cmを測る。（柱穴）P1・P2は主柱穴と考えられ、深さはそれぞれ2cmを測る。P3は性格不明のピットで、深さ31cmを測る。P4は出入り口施設に伴う柱穴で深さ4cmを測る。

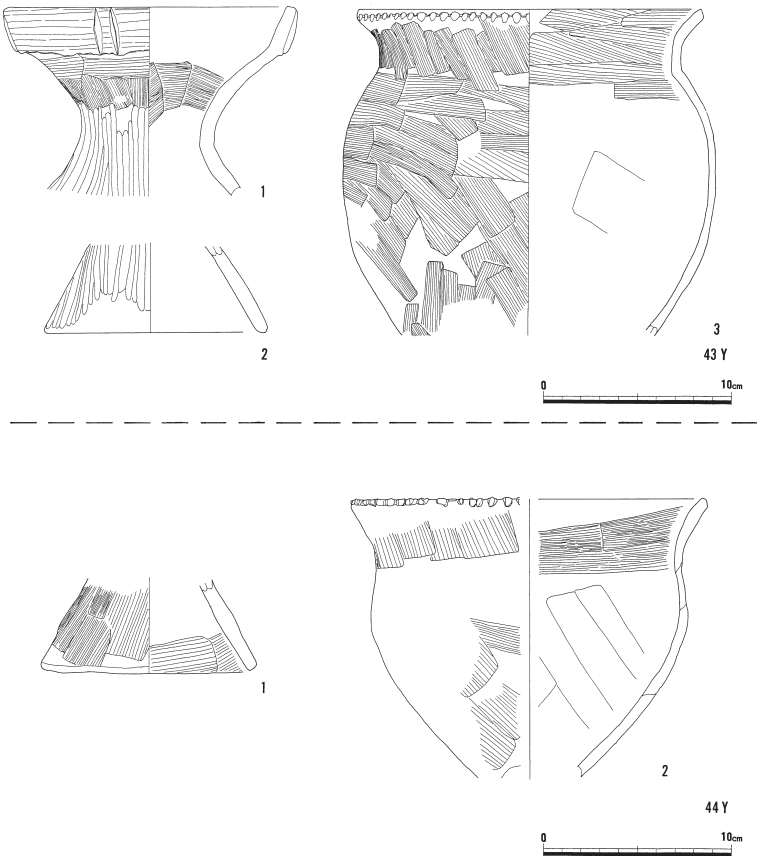
〔覆土〕 黒褐色土を基調とし、2層に分層される。

〔遺物出土状況〕 弥生土器片が覆土中から散在して出土している。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代初頭



第10図 第44号住居跡（44 Y）（1/60、1/30）



第11図 第43・44号住居跡出土遺物（43 Y・44 Y）（1/4）

No.	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考
1	壺	15.5	—	（10.0）	橙褐色	長石 石英 黒色粒子	外面：ヘラ削り 内面：刷毛目
2	台付甕	—	11.8	（4.7）	暗橙色	長石 石英 白色粒子 小礫	外面：ヘラ磨き
3	台付甕	18.1	—	（17.2）	暗橙色	長石 石英 白色粒子	外面：刷毛目 内面：刷毛目、ヘラナデ

※（ ）は現存の規格

第2表 第43号住居跡出土土器観察表

No.	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考
1	台付甕	—	11.4	（5.0）	暗橙色	石英 白色粒子 黒色粒子	外面：刷毛目 内面：刷毛目
2	台付甕	[18.0]	—	（14.8）	暗橙色	石英 白色粒子 黒色粒子	外面：刷毛目 内面：刷毛目、ヘラナデ

※ [] は推定の規格、（ ）は現存の規格

第3表 第44号住居跡出土土器観察表

第45号住居跡（45 Y）（第12図）

〔位置〕 調査区南東部

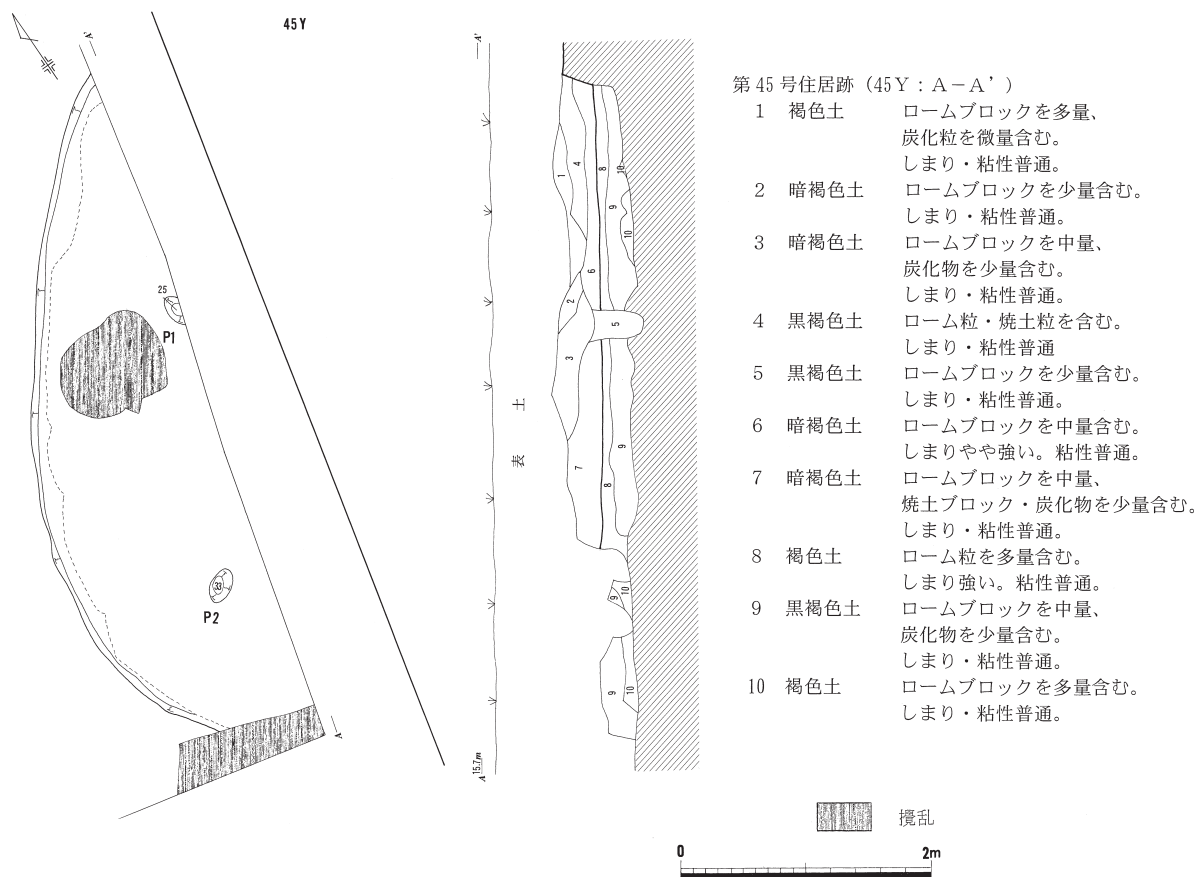
〔構造〕（平面形）隅丸方形か（規模）長軸5.0 m以上
×短軸2.2 m以上（主軸方位）N - 36° - E（壁高）
床面から23 cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（床）
平坦で、壁際を除いて硬化範囲を確認した。黒褐色
及び褐色土の第9・10層を埋め戻し、褐色土の第
8層を貼床としている。（柱穴）P 1・P 2は主柱
穴と考えられ、深さ25 cm・33 cmを測る。

〔覆土〕 暗褐色土を基調とし、7層に分層される。多
くの層にロームブロックが含まれることから、人為
堆積と考えられる。

〔遺物出土状況〕 弥生土器片が覆土中から散在して出
土している。小片の為、図化はできなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代初頭

〔備考〕 P 1は覆土第6・7層が堆積した後に抜き取
られた状況を示していることから、埋め戻しの途中
で抜き取られたものと捉えられる。



第12図 第45号住居跡（45 Y）（1/60）

2. 不明遺構

第1号不明遺構（第13図）

〔位置〕 調査区北東部

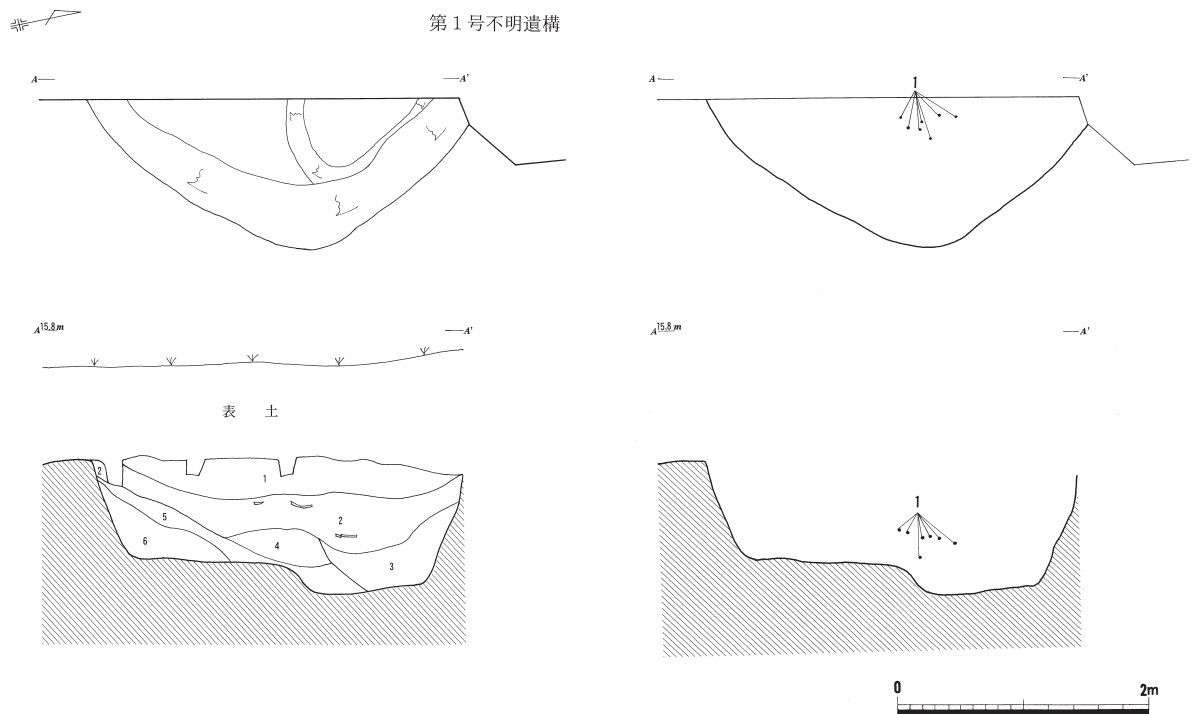
〔構造〕 本跡は、方形区画溝の東コーナー部と考えられる。（開口部幅）1.2 m以上（底部幅）0.6 m以上（壁高）底部から110 cmを測り、緩やかに立ち上がる。（底部）平坦で、北東部で一段下がる。

〔覆土〕 黒褐色土を基調とし、6層に分層される。

〔遺物出土状況〕 覆土中層から、1が潰れた状態で出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代初頭

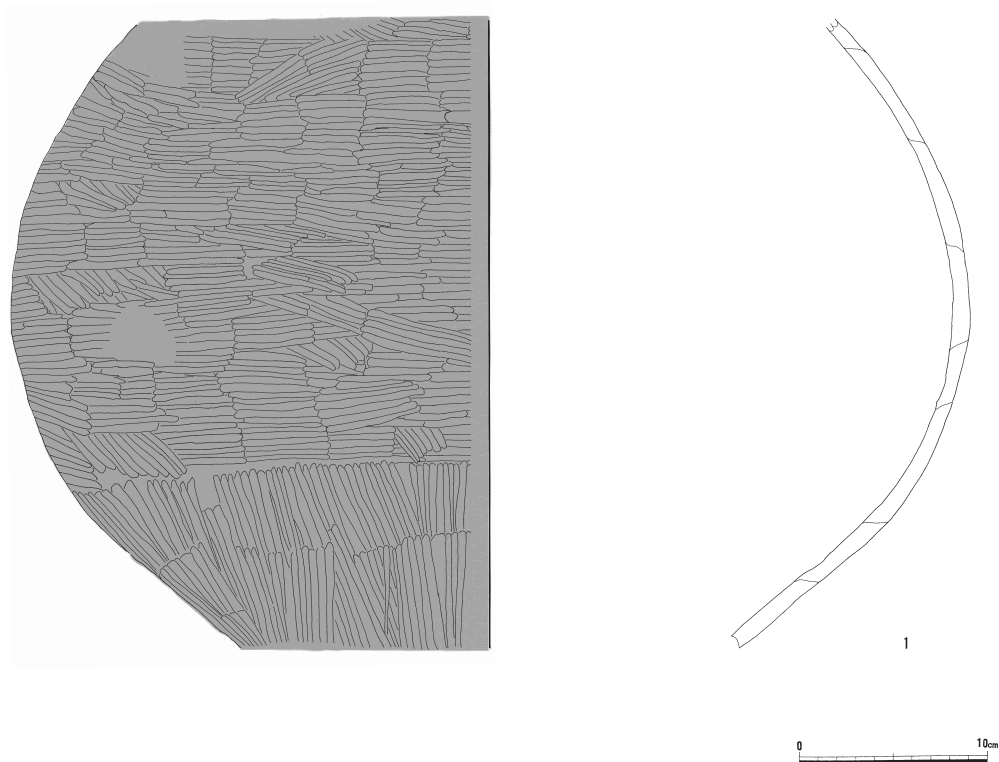
〔備考〕 本跡は、方形区画溝のコーナー部と考えられる構造で覆土中から赤彩された壺が出土していることから、方形周溝墓の周溝である可能性がある。



第1号不明遺構（第1号不明遺構：A-A'）

- | | | |
|---|------|-----------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 炭化粒を少量、ローム粒を微量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 2 | 黒褐色土 | ロームブロック・炭化物を少量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 3 | 黒褐色土 | ロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 4 | 暗褐色土 | ロームブロックを中量、炭化粒を少量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 5 | 黒褐色土 | ロームブロックを少量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 6 | 褐色土 | ロームブロックを中量含む。
しまり・粘性普通。 |

第13図 第1号不明遺構（1/60）



第14図 第1号不明遺構出土遺物（1/4）

No.	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考
1	壺	—	—	(34.3)	黄褐色	長石 石英 白色粒子	外面：ヘラ磨き、赤彩

※（ ）は現存の規格

第4表 第1号不明遺構出土土器観察表

第2節 古墳時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

第31号竪穴住居跡（31 H）（第15～17図）

〔位置〕 調査区東部

〔構造〕（平面形）方形（規模）長軸6.3m×短軸6.3m（主軸方位）N－44°－W（壁高）床面から34～54cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（床）平坦で、硬化範囲は確認できなかった。また、壁際で周溝が巡っている。（カマド）北西壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで115cmで、燃焼部幅は58cmである。袖部はほぼ壊されていたものの、壁際に地山を掘り残した基部が確認された。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に36cm掘り込まれ、煙道部から外傾している。

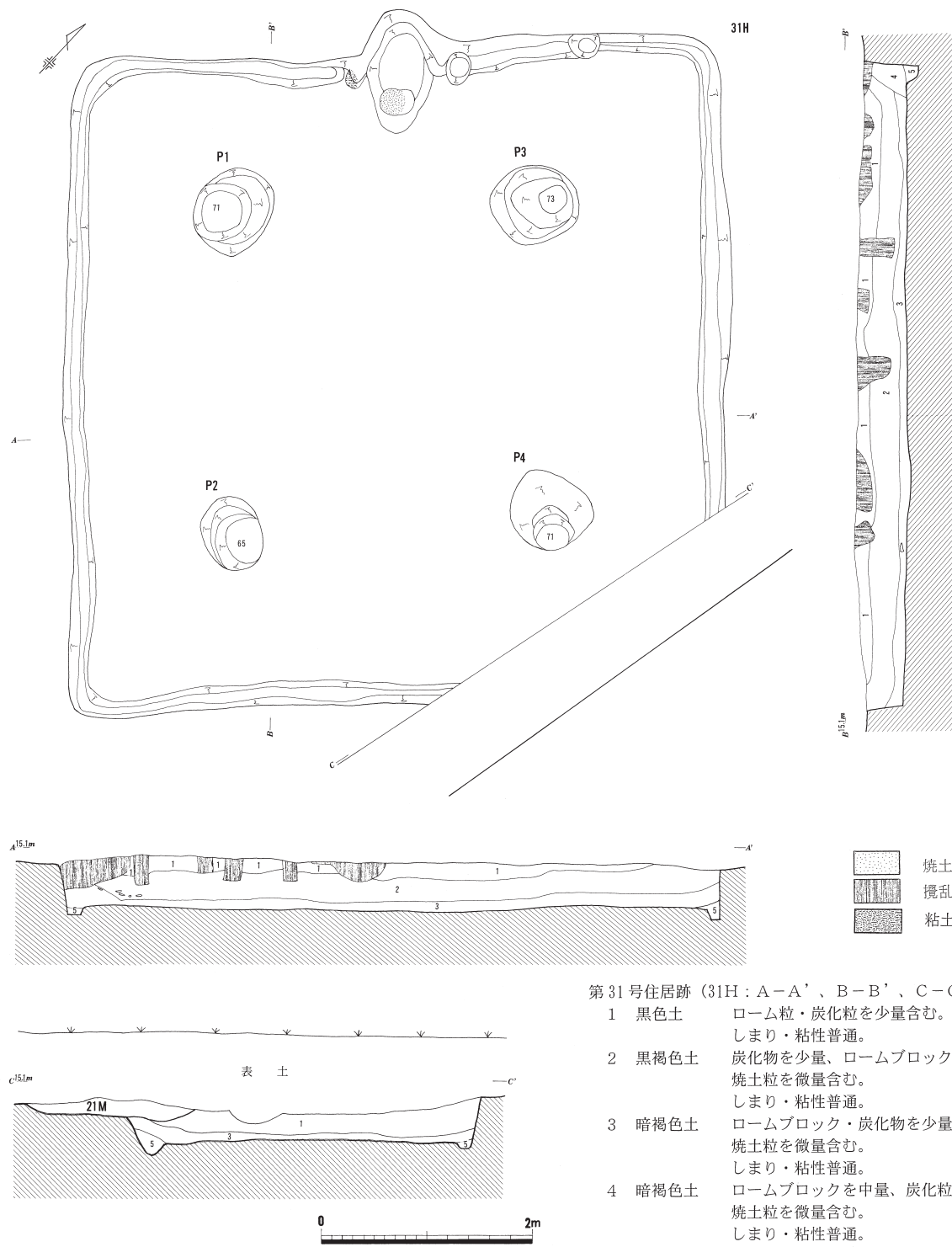
右袖部に隣接してピットが確認された。（柱穴）確認された主柱穴はP 1～P 4で、深さ65～73cmを測る。

〔覆土〕 黒褐色土を基調とし、5層に分層される。第1～3層は、周囲から土砂が流入した状況であることから、自然堆積と考えられる。

〔遺物出土状況〕 住居跡全体の覆土中層から下層で、多量の土器片が投棄された状態で出土した。特に土師器甕片の出土量が目立つ。

〔時期〕 7世紀後葉

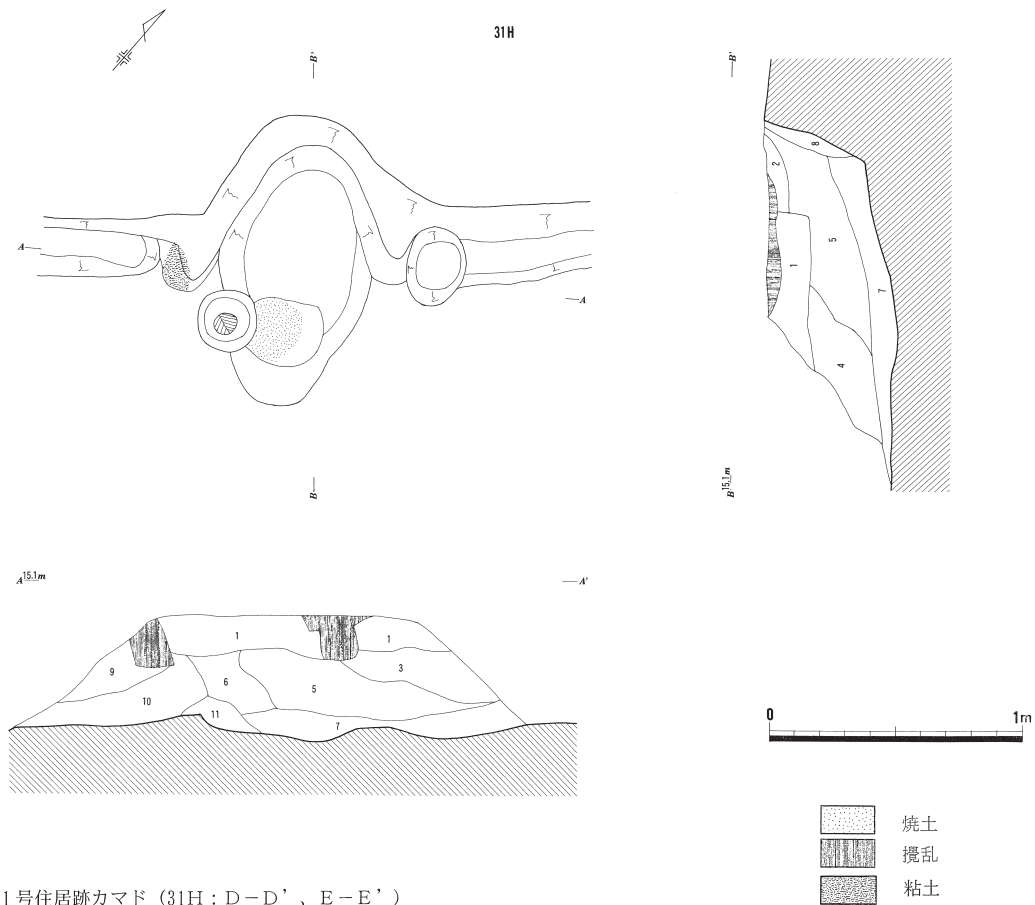
〔備考〕 出土遺物は、自然堆積と考えられる覆土中から投棄された状態で出土したことから、本跡は住居廃絶後に廃棄土坑として機能していたものと捉えられる。



第15図 第31号住居跡1 (31H) (1/60)



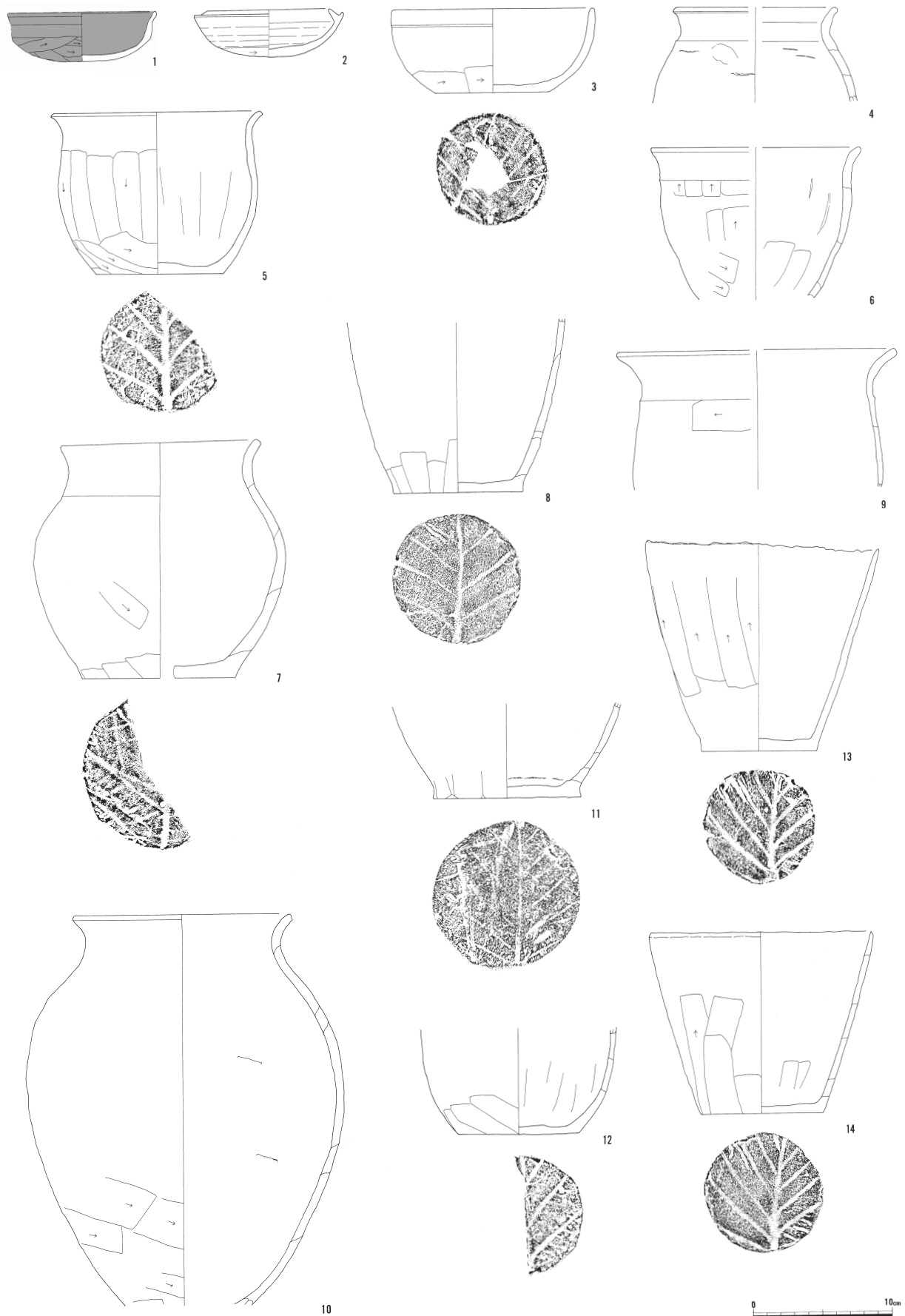
第16図 第31号住居跡2 (31 H) (1/60)



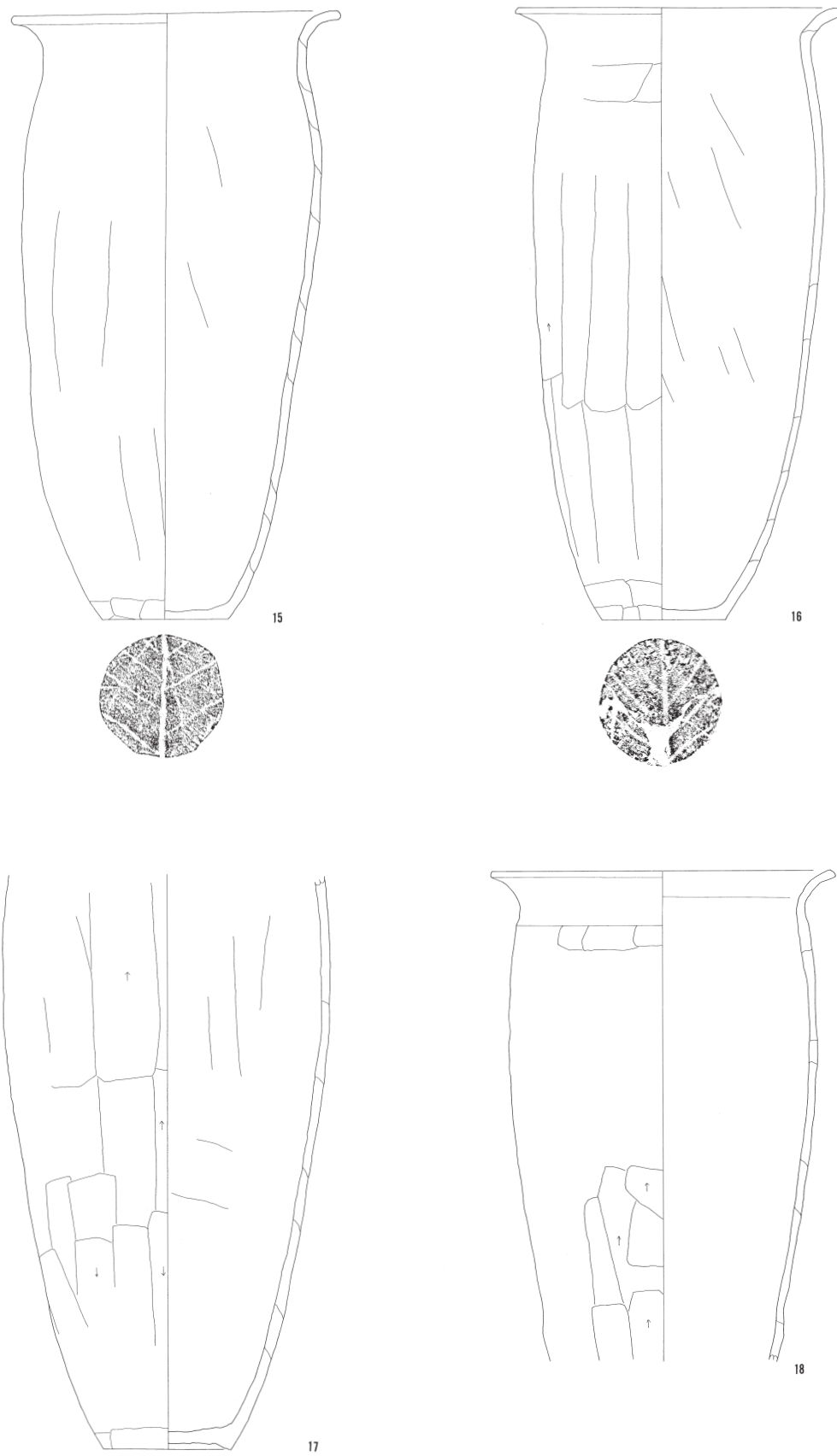
第31号住居跡カマド (31H : D-D'、E-E')

- | | |
|---------|--|
| 1 黒褐色土 | ロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 2 灰白色土 | 粘土粒を中量、焼土ブロックを少量、ローム粒を微量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒を少量、焼土粒・炭化粒を微量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 4 黒褐色土 | 焼土粒を少量、ローム粒を微量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 5 黒褐色土 | ロームブロックを中量、焼土粒・炭化粒・粘土ブロックを少量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 6 黒褐色土 | 焼土ブロックを中量、炭化物を少量、ローム粒を微量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 7 暗褐色土 | ローム粒・焼土ブロック・炭化物を少量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 8 褐色土 | ロームブロックを中量、焼土ブロック少量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 9 暗褐色土 | 焼土ブロックを中量、炭化物を少量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 10 赤褐色土 | 焼土ブロックを中量、炭化物を少量含む。
しまり・粘性普通。 |
| 11 褐色土 | ロームブロックを多量含む。
しまり・粘性普通。 |

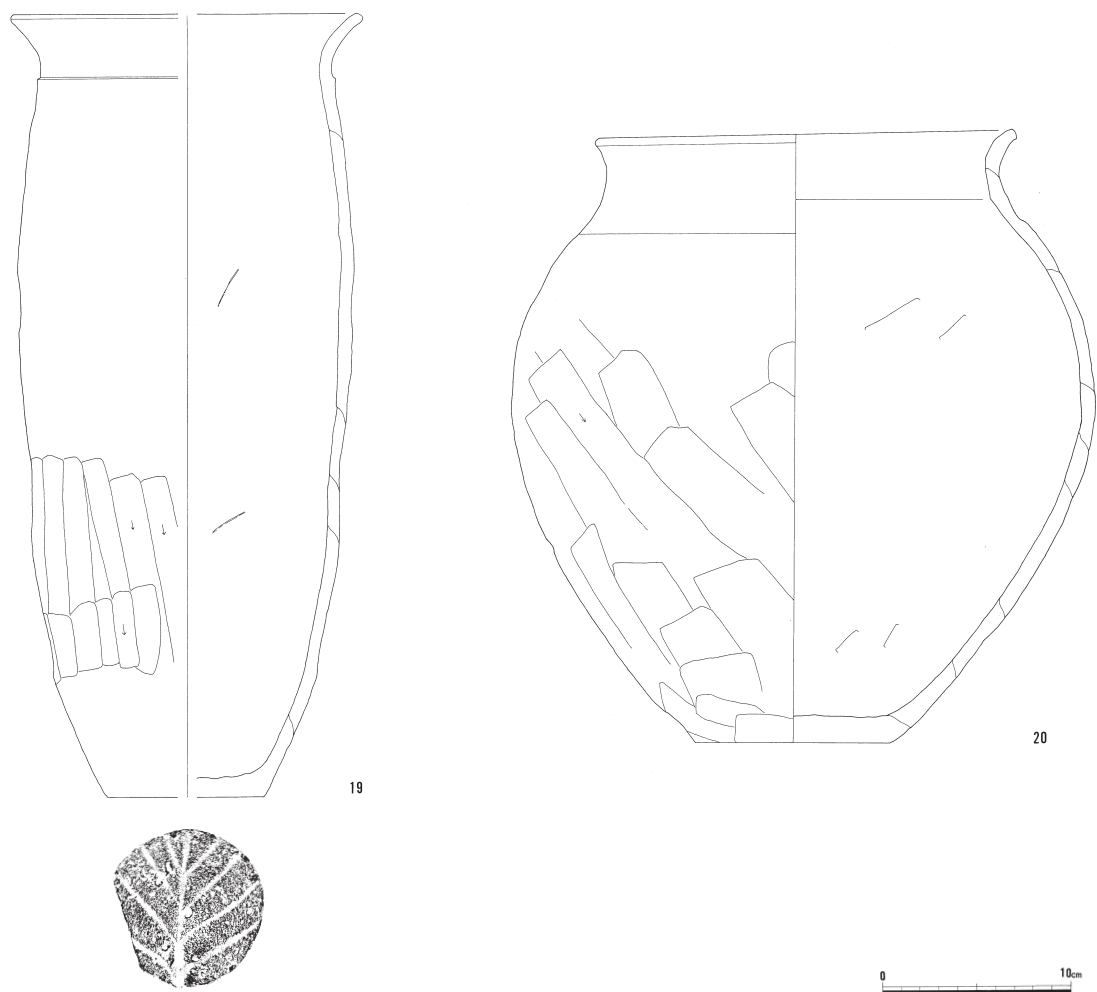
第17図 第31号住居跡3 (31H) (1/30)



第18図 第31号住居跡出土遺物 1 (31 H) (1/4)



第19図 第31号住居跡出土遺物2 (31H) (1/4)



第20図 第31号住居跡出土遺物3（31 H）（1/4）

No.	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考
1	土師器	坏	10.6	—	3.5	赤褐色	石英 白色粒子 黑色粒子	底部：ヘラ削り 外内面：赤彩
2	須恵器	坏	10.7	4.7	3.4	灰白色	石英 白色粒子 黑色粒子	底面：回転ヘラ削り
3	土師器	坏	14.5	8.0	6.0	橙色	長石 石英 角閃石	外面：ヘラ削り 底面：木葉痕
4	土師器	小形甕	[11.7]	—	(6.8)	橙褐色	長石 石英 角閃石 小礫	外面：指頭圧痕 内面：ヘラナデ
5	土師器	小形甕	15.2	9.0	11.5	橙褐色	長石 石英 角閃石 白色粒子	外面：ヘラ削り 内面：ヘラナデ 底面：木葉痕
6	土師器	小形甕	[15.0]	—	(10.9)	橙褐色	長石 石英	外面：ヘラ削り 内面：ヘラ削り、ヘラナデ

※ [] は推定の規格、() は現存の規格

第5表 第31号住居跡出土土器観察表1

No	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考
7	土師器	小形甕	14.2	10.9	17.0	暗橙色	長石 石英 白色粒子 小礫	外面：ヘラ削り 底面：焼成前に穿孔 木葉痕
8	土師器	甕	—	9.2	(12.2)	黒褐色	長石 石英 黒色粒子	外面：ヘラ削り 底面：木葉痕
9	土師器	甕	[20.8]	—	(9.9)	橙褐色	長石 石英 角閃石 小礫	外面：ヘラ削り
10	土師器	甕	15.4	—	(28.0)	橙色	長石 石英 角閃石 白色粒子	外面：ヘラ削り 内面：ヘラナデ
11	土師器	甕	—	10.6	(6.7)	橙褐色	長石 石英 角閃石	外面：ヘラナデ 底面：木葉痕
12	土師器	甕	—	8.6	(7.6)	橙褐色	長石 石英 角閃石 小礫	外面：ヘラ削り 内面：ヘラ削り 底面：木葉痕
13	土師器	鉢	16.7	8.2	15.2	橙色	長石 石英 角閃石 白色粒子 小礫	外面：ヘラ削り 底面：木葉痕（14と同一） 甕の下半部を転用か
14	土師器	鉢	16.0	8.6	13.0	橙色	長石 石英 角閃石 小礫	外面：ヘラ削り 内面：ヘラナデ 底面：木葉痕（13と同一） 甕の下半部を転用か
15	土師器	甕	20.4	7.9	37.8	橙色	長石 石英 角閃石 白色粒子 黒色粒子	外面：ヘラ削り 内面：ヘラナデ 底面：木葉痕
16	土師器	甕	20.3	7.6	37.9	橙色	長石 石英 角閃石 白色粒子 黒色粒子	外面：ヘラ削り 内面：ヘラナデ 底面：木葉痕
17	土師器	甕	—	7.9	(35.5)	橙褐色	長石 石英 角閃石 黒色粒子	外面：ヘラ削り 内面：ヘラナデ
18	土師器	甕	21.3	—	(30.0)	橙褐色	長石 石英 小礫	外面：ヘラ削り
19	土師器	甕	[18.5]	[8.3]	41.4	橙褐色	長石 石英 黒色粒子	外面：ヘラ削り 内面：ヘラナデ
20	土師器	甕	22.2	10.2	32.2	橙褐色	長石 石英 白色粒子	外面：ヘラ削り 内面：ヘラナデ

※ [] は推定の規格、() は現存の規格

第6表 第31号住居跡出土土器観察表2

2. 溝状遺構

第1号溝状遺構（第15図）

〔位置〕 調査区北東部

〔構造〕（開口部幅）1.0～1.1 m（底部幅）0.5～0.7 m
（壁高）底部から50cmを測り、緩やかに立ち上がる。
（底部）平坦で、東部で一段下がる。

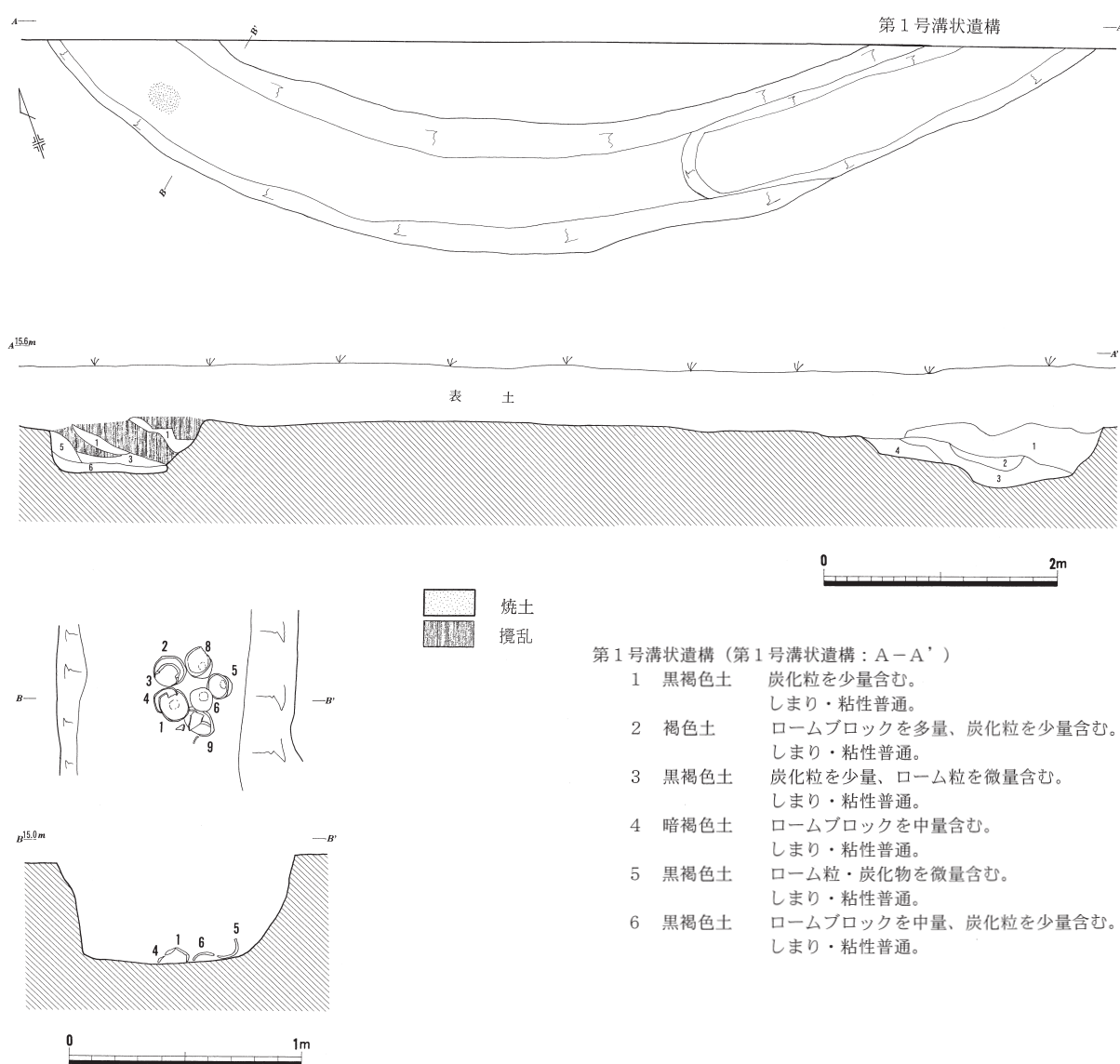
〔覆土〕 黒褐色土を基調とし、6層に分層される。

〔遺物出土状況〕 本跡西部の底面から、9個のほぼ完形の坏が置かれた状態で出土した。また、隣接した

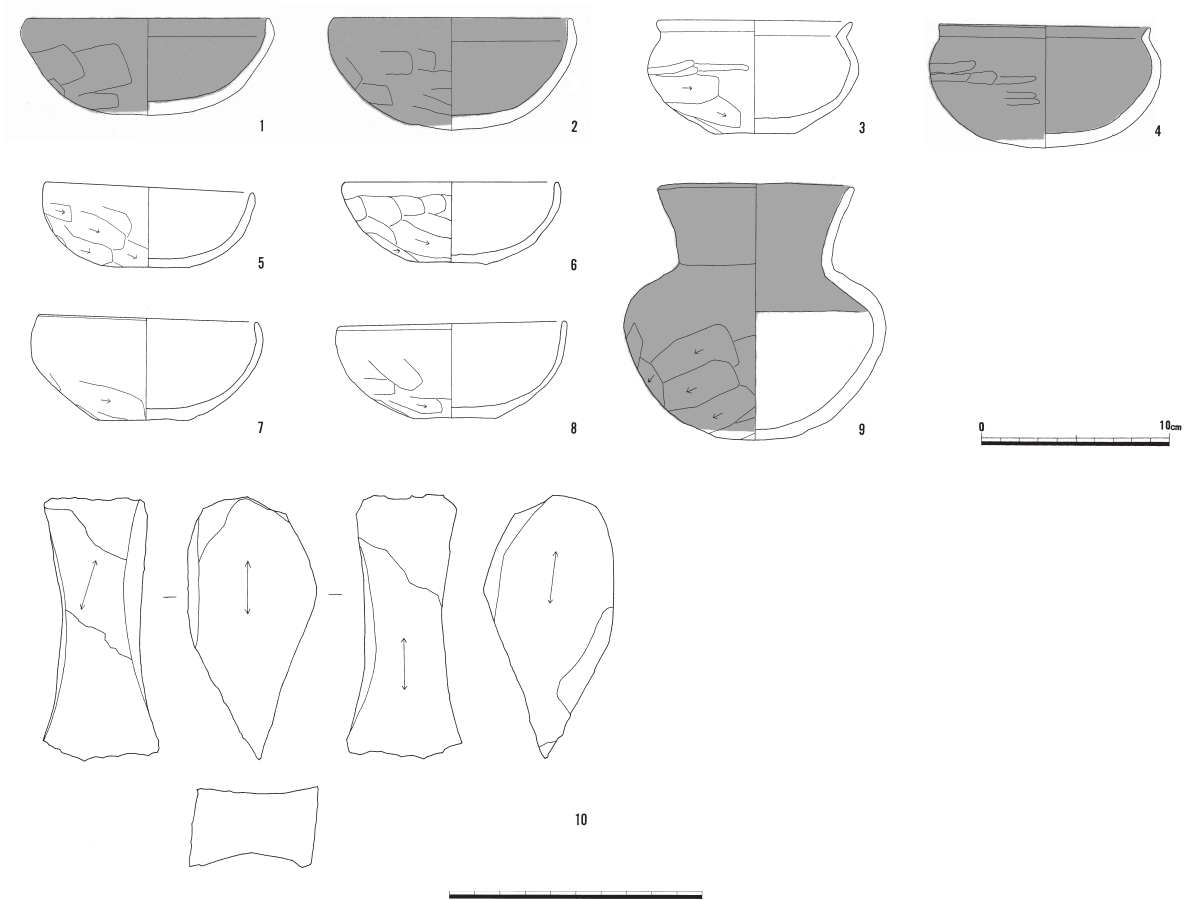
底面からは、焼土塊及び微量な骨片が出土した。

〔時期〕 5世紀後葉

〔備考〕 本跡は土盛部や主体部は確認できなかったものの、底部で多数の完形の坏がまとめて置かれた状態で出土していることから、古墳の周溝である可能性が高い。また、まとめて出土した坏に隣接して焼土塊や微量の骨片が出土していることから、祭祀等の行為が行われた可能性がある。



第21図 第1号溝状遺構（1/60、1/30）



第22図 第1号溝状遺構出土遺物（1/4、1/3）

No.	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考
1	土師器	坏	12.7	—	5.2	赤褐色	長石 石英 白色粒子 赤色粒子	外面：ヘラ削り 外内面：赤彩
2	土師器	坏	13.1	—	5.9	赤褐色	長石 石英 白色粒子	外面：ヘラ削り 外内面：赤彩
3	土師器	坏	10.3	4.2	6.0	黒褐色	長石 石英 白色粒子	外面：ヘラ削り、ヘラ磨き 外内面：黒彩 (黒色処理)
4	土師器	坏	11.1	—	6.7	赤褐色	長石 白色粒子 赤色粒子	外面：ヘラ磨き 外内面：赤彩
5	土師器	坏	11.2	3.9	4.5	黒色	長石 石英 小礫	外面：ヘラ削り 外内面：黒彩 (黒色処理)
6	土師器	坏	11.5	3.8	4.3	黒色	長石 石英 小礫	外面：ヘラ削り 外内面：黒彩 (黒色処理)
7	土師器	坏	12.3	4.9	5.6	黒色	長石 石英 白色粒子	外面：ヘラ削り 外内面：黒彩 (黒色処理)
8	土師器	坏	12.2	4.4	4.1	暗褐色	長石 石英 白色粒子	外面：ヘラ削り 外内面：黒彩 (黒色処理)

第7表 第1号溝状遺構出土土器観察表1

No.	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考
9	土師器	壺	10.4	—	13.5	赤褐色	長石 石英 白色粒子	外面：ヘラ削り 外内面：赤彩

第8表 第1号溝状遺構出土土器観察表2

No.	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考
10	砥石	10.6	4.6	4.5	240	凝灰岩か	砥面4箇所

第9表 第1号溝状遺構出土石器観察表

第3節 平安時代の遺構と遺物

第30号竪穴住居跡（30 H）（第17図）

〔位置〕 調査区北東部

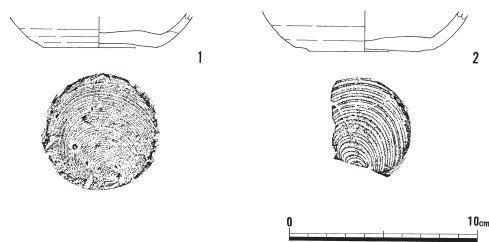
〔構造〕（平面形）方形か（規模）長軸2.1 m以上×短軸2.7 m以上（主軸方位）N－3°－W（壁高）床面から20 cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（床）ほぼ平坦で、壁際を除いて硬化範囲を確認した。また、壁際で周溝が巡っている。（柱穴）P 1は主柱穴と考えられ、深さ42 cmを測る。

〔覆土〕 黒褐色土を基調とし、4層に分層される。

〔遺物出土状況〕 覆土中から、土師器片や須恵器片が散在して出土している。

〔時期〕 9世紀前葉か

〔備考〕 P 1は、覆土第1・2層が堆積した後に抜き取られた状況を示していることから、住居廃絶後の埋没途中で抜き取られたものと捉えられる。

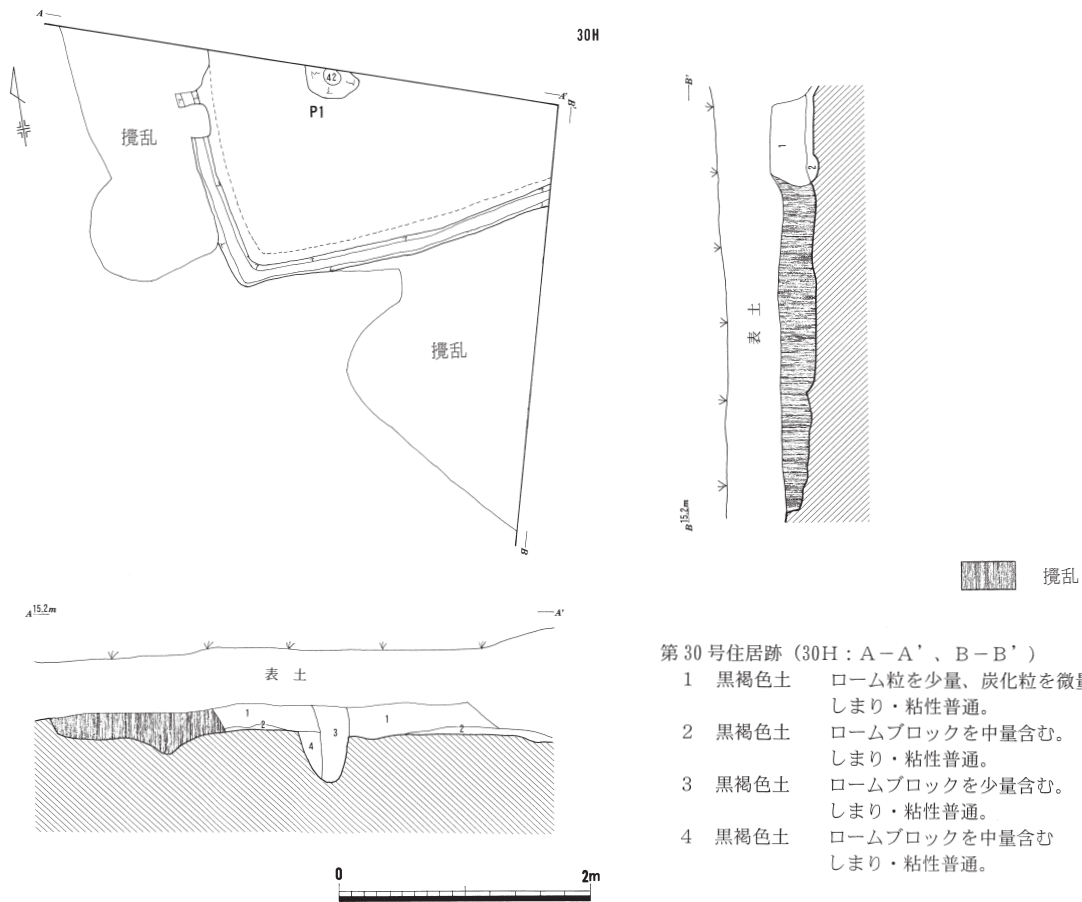


第23図 第30号住居跡出土遺物（30 H）（1/4）

No.	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考
1	須恵器	坏	—	6.0	(1.6)	灰白色	長石 石英 白色粒子 白針状物質	底面：回転糸切り 産地：南比企か
2	須恵器	坏	—	5.8	(2.1)	灰白色	長石 石英 白針状物質	底面：回転糸切り 産地：南比企か

※（ ）は現存の規格

第10表 第30号住居跡出土土器観察表



第24図 第30号住居跡 (30H) (1/60)

第4節 その他の遺構と遺物

1. 火葬墓

第1号火葬墓 (1K) (第25図)

[位置] 調査区北部

[構造] (平面形) 楕円形 (規模) 長径87cm×短径72cm。底面は凹凸しており、底面までの深さは70cmである。

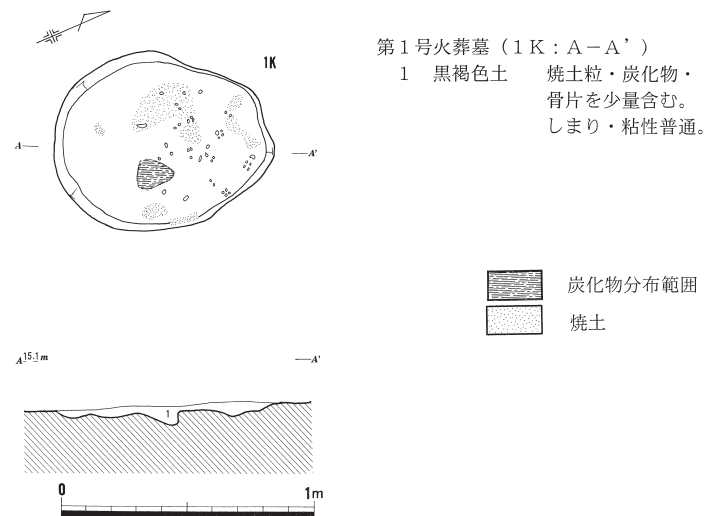
[覆土] 黒褐色土を基調とした単一層である。

[遺物出土状況] 出土遺物は皆無である。全体の覆土

中から炭化材及び焼土塊が検出され、骨粉もわずかに出土している。

[時期] 中近世か

[備考] 炭化材や焼土塊、骨粉が出土したことから、火葬墓と捉えた。また、本跡は、第21号溝跡を掘り込んでいる。



第25図 第1号火葬墓（1K）(1/30)

2. 溝跡

第21号溝跡（21M）(第26図)

[構造]（開口部幅）1.1～1.8m（底部幅）0.8～1.7m
（壁高）底部から13cmを測り、緩やかに立ち上がる。
（底部）平坦である。

[覆土] 黒褐色土を基調とした、単一層である。

[遺物出土状況] 弥生土器片や土師器片が出土した。

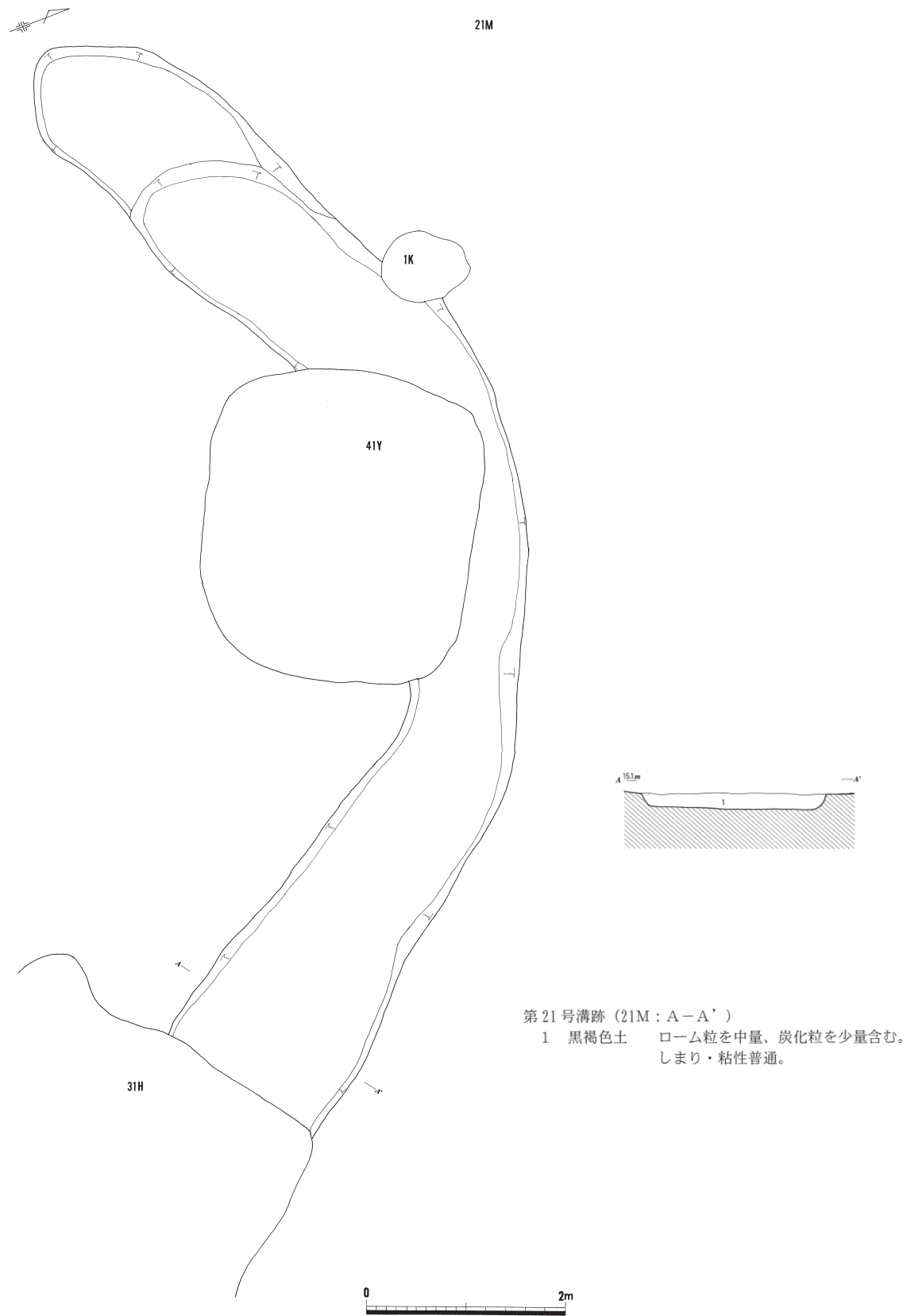
[時期] 中近世か

[備考] 本跡は第41号住居跡（41Y）・第31号住居跡（31H）を掘り込み、第1号火葬墓に掘り込まれている。

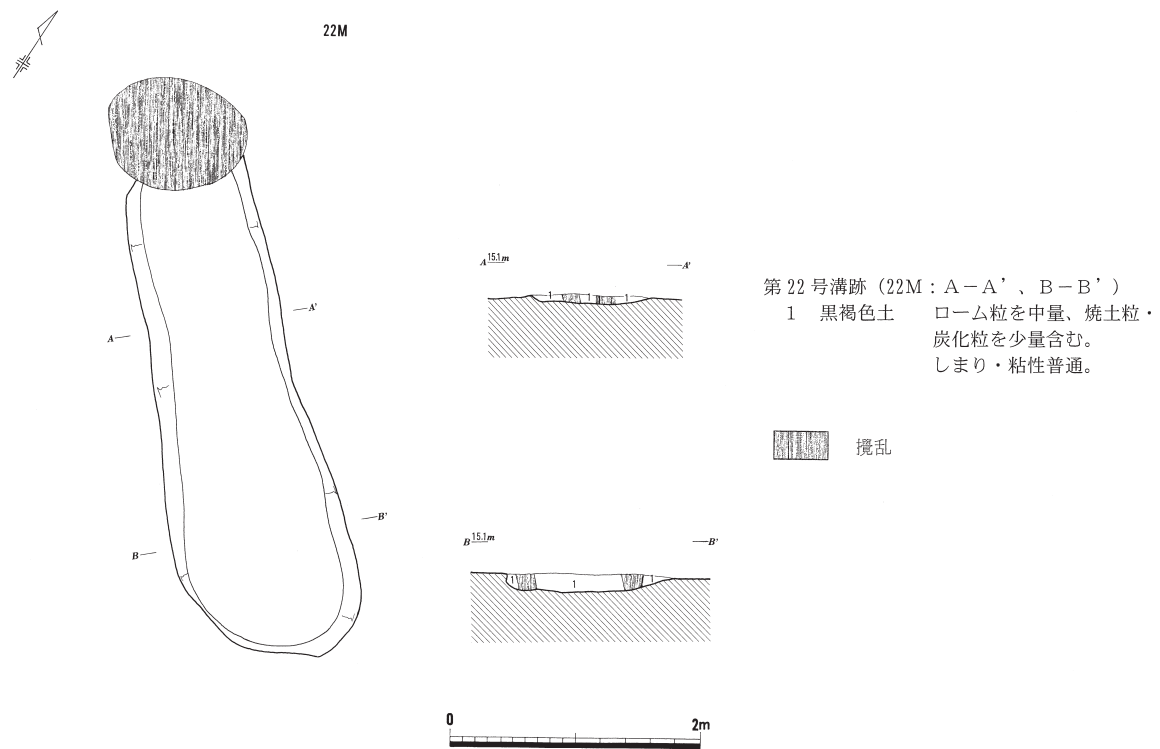
No.	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考
1	甕	—	—	(9.9)	赤褐色	長石 石英 白色粒子	外面：ヘラ磨き 赤彩 内面：ヘラナデ
2	陶器 甕	—	11.8	(9.5)	灰褐色	—	外面：自然釉付着 産地：常滑
3	壺か	—	—	(40.8)	暗橙色	長石 石英	外面：刷毛目 内面：ヘラナデ

（ ）は現存の規格

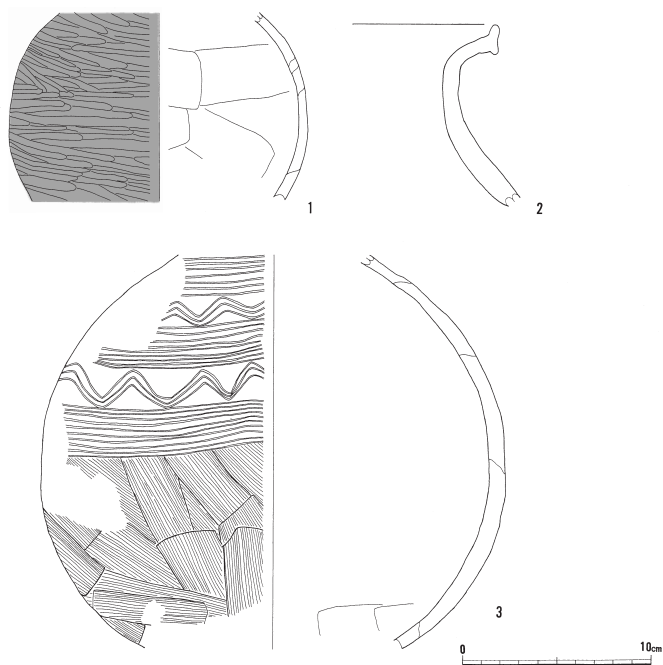
第11表 遺構外出土土器観察表



第26図 第21号溝跡 (21M) (1/60)



第27図 第22号溝跡 (22M) (1/60)



第28図 遺構外出土遺物 (1/4)

第3章 調査のまとめ

1. 調査のまとめ

観音前遺跡は、平成22年に市街化区域に再編入された水子地区に所在するものの、現在の遺跡内は畑地が多く残り、市内の他遺跡と比べて開発は未だ少ないものとなっている。その為、発掘調査の件数・面積もまだ少なく、遺跡全容の解明までには至っていない。しかしながら、今回の第47地点の調査によって、新たな資料も追加されたことから、本稿では調査のまとめを行い、若干ながらの考察を行いたい。

観音前遺跡のこれまでの調査では、主に縄文時代早期の集落跡、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落跡、古墳時代後期（7世紀代）の集落跡、平安時代の集落跡、中近世の墓が確認されている。特に弥生時代後期～古墳時代初頭の集落跡と古墳時代後期（7世紀代）集落跡では多くの竪穴住居跡が確認され、当遺跡を代表する時代の集落跡であると言える。

第47地点の調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡7軒、同時期の方形周溝墓の可能性のある不明遺構1基、古墳時代後期（5世紀代）の古墳の可能性のある溝状遺構1基、古墳時代後期（7世紀代）の竪穴住居跡1軒、平安時代（9世紀代）の竪穴住居跡1軒、中近世以降の火葬墓1基、同時期の溝跡2条が確認されている（第3図）。

弥生時代後期～古墳時代初頭の集落については、遺跡中央部の第10地点において、環濠と思われる溝跡と多数の竪穴住居跡が確認され、遺跡東部に当該期の環濠集落の存在が予想されていた^{1)・2)}。第47地点は第10地点より東の遺跡東部に位置しており、予想される中では、環濠内の集落の一部であると想定できる。また、今回確認された第1号不明遺構を仮に方形周溝墓とした場合、第47地点周辺に弥生時代後期～古墳時代初頭の墓域が存在すると考えられる。これを踏まえ、過去に遺跡内の畑地から方形周溝墓に伴うと考えられる弥生時代後期の壺が見つかったことから³⁾、観音前遺跡中央部から東部にかけて同時代の墓域が広がっているものと捉えられる。

古墳時代後期の7世紀代の遺構については、今回第31号住居跡（31H）が確認されているが、これまで

に遺跡南東部の第5B・10・18・29地点で当該期の竪穴住居跡が確認され、遺跡南西部の第28・43地点でも竪穴住居跡が確認されている。遺構の密度の濃さから遺跡南東部が集落の中心部とされ⁴⁾、第31号住居跡もこれに含まれると思われる。

2. 第1号溝状遺構について

ここでは、検出された第1号溝状遺構について、若干の考察を行いたい。本跡は、第47地点調査区北東部で検出され、やや弧を描いて調査区外に伸びている。遺構確認面からの深さは約50cmで、壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。本跡西部の底面からは、ほぼ完形の8個体の土師器坏と1個体の土師器壺が円を描くようにして並べられ、置かれていた（第21図）。一部の坏は、2個体を重ねている。また、坏が置かれた位置に隣接して、底面からは焼土塊と骨粉が検出されている。溝状遺構の規模や形状、供えるようにして土師器坏・壺が出土していることから、土盛部や主体部は確認されていないが、古墳の周溝の可能性があると考えられる。仮に古墳であった場合、焼土塊や骨粉の検出から、火を扱った祭祀行為が行われていたのではないかとと思われる。

底面から出土した8個体の土師器坏は、5世紀後葉に帰属するもので、1・2・4は赤彩、3・5～9は黒彩（黒色処理）が施されている（第22図）。1・2は底部から口縁部にかけて内湾するもので、底部は丸底である。外面にヘラ削り痕を残し、5～8に比べ口径が大きく、器高が高い。5～8は底部から口縁部にかけて内湾し、底部は平底、外面にヘラ削り痕を残す。4は、頸部にくびれを持ち、丸底で器高がやや高い。3は、いわゆる内斜口縁坏と考えられ、平底で、外面にヘラ磨き痕とヘラ削り痕が混在している。

以上の様に、形状や色合いの異なる坏が共伴して出土しており、当遺跡内に多方面から土器が搬入したものと捉えられる。ただし、これらの土器は祭祀行為の非日常で使われた可能性がある為、日常の生活内で当遺跡に多方面から土器が搬入したかどうかについては、別に検討が必要であろう。

3. 第31号住居跡出土遺物について

これまでの調査においても7世紀代の竪穴住居跡は報告されていたが、第47地点でも同時期の竪穴住居跡が検出され、資料として良好な遺物が出土したため、本稿では特に出土遺物について触れていきたい。

第31号住居跡(31H)からは、多量の土師器片が出土している(第18～20図)。特に、小形甕や甕(長胴甕)の出土量が多い。これらの土器は投棄された状態で、自然堆積土の覆土上層から覆土中層にかけて出土している為、住居使用時のものとは若干の時間差があると思われる。

個々の土器を観察すると1は比企型坏で、赤彩を施し、口縁部の断面形態がS字状を呈する。2は須恵器の坏身である。TK-217型式に該当すると思われる⁵⁾、口縁部の返りが短く、器高が偏平である。3は無彩の土師器坏で、いわゆる「在地系無彩系土器」と捉えられそうであるが⁶⁾、本来の無彩系土器は口縁部外面直

下に稜を巡らす3は稜ではなく沈線が巡り、若干の違いがある。

甕は小形甕と丸甕、長甕(長胴甕)で、長甕の15・16・18・19は口径に最大径を持つものである。

13・14は、本来長甕の下半部分であるが、割れ口を削って口唇部を作り出しており、その形状から鉢と捉えた。二次転用と考えられる。また、13・14の底面木葉痕が同一であり、特筆される。

これらの遺物について、志木市における編年観を用いて年代決定を試みる⁷⁾。1の比企型坏については、口径が10.6cmと小型化が進んでおり、およそ7世紀後葉と位置付けられる。長甕については、15・16・18・19は口径に最大径を持ち、7世紀後葉の特徴を持つ。

以上のことから、第31号住居跡はおおよそ7世紀後葉の所産と捉えられよう。

註

- 1) 早坂廣人『観音前遺跡第10地点 発掘調査報告書』「富士見市遺跡調査会調査報告第48集」1997.3
- 2) 隈本健介『観音前遺跡第43地点 神明遺跡第22地点 発掘調査報告書』「富士見市遺跡調査会調査報告第68集」2015.9
- 3) 加藤秀之「観音前遺跡発見の壺形土器について」『観音前遺跡第10地点 発掘調査報告書』1997.3
- 4) 註2に同じ
- 5) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981.7
- 6) 尾形則敏「志木市における古墳時代の土師器の編年(1) - 5世紀から7世紀の坏形土器の変遷 -」『あらかわ第3号』2000.5
- 7) a 註6に同じ
b 尾形則敏「荒川下流右岸地域における古墳時代中・後期の様相 - 東京西北～東北部を中心とした5～7世紀の遺跡と土器様相」『あらかわ第8号』2005.5

参考文献

- 尾形則敏「いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点 - 小地域を対象とした編年の確立に向けて -」『あらかわ第2号』1999.5
- 尾形則敏「武蔵野台地北西部における古墳時代の地域性 - 集落を中心とする5世紀から7世紀の土器様相 -」『あらかわ第5号』2002.5
- 尾形則敏・深井恵子「城山遺跡第42地点」『志木市遺跡調査会調査報告第10集』2005.11



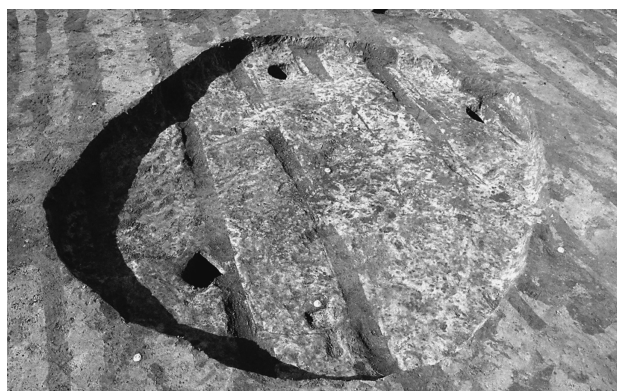
〔1〕第39号住居跡完掘状況（39 Y）



〔2〕第40号住居跡遺物出土状況 1（40 Y）



〔3〕第40号住居跡遺物出土状況 2（40 Y）



〔4〕第40号住居跡完掘状況（40 Y）



〔5〕第42号住居跡完掘状況（42 Y）



〔6〕第43号住居跡炭化材・焼土塊検出状況（43 Y）



〔7〕第43号住居跡完掘状況（43 Y）



〔8〕第44号住居跡完掘状況（44 Y）

写真図版 2



〔1〕第44号住居跡炉跡覆土堆積状況（44 Y）



〔2〕第44号住居跡炉跡完掘状況1（44 Y）



〔3〕第44号住居跡炉跡完掘状況2（44 Y）



〔4〕第45号住居跡完掘状況（45 Y）



〔5〕第1号不明遺構遺物出土状況



〔6〕第1号溝状遺構完掘状況



〔7〕第1号溝状遺構遺物出土状況1



〔8〕第1号溝状遺構遺物出土状況2



〔1〕第30号住居跡完掘状況（30 H）



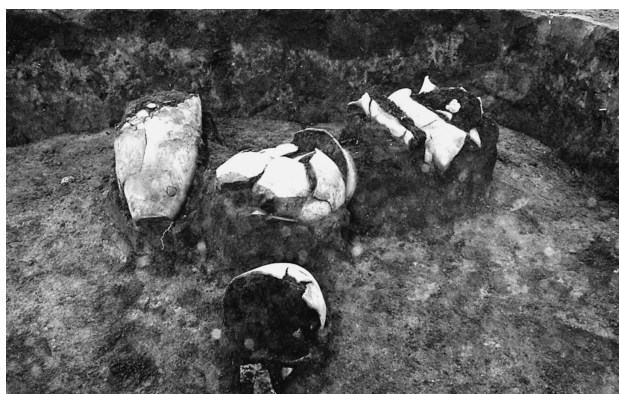
〔2〕第31号住居跡遺物出土状況1（31 H）



〔3〕第31号住居跡遺物出土状況2（31 H）



〔4〕第31号住居跡遺物出土状況3（31 H）



〔5〕第31号住居跡遺物出土状況4（31 H）



〔6〕第31号住居跡完掘状況（31 H）



〔7〕第31号住居跡カマド完掘状況（31 H）



〔8〕第1号火葬墓炭化材・焼土塊・骨粉検出状況（1 K）

写真図版 4



〔1〕 第40号住居跡出土遺物 (40 Y) (No. 1)



〔2〕 第1号溝状遺構出土遺物 (No. 1)



〔3〕 第1号溝状遺構出土遺物 (No. 2)



〔4〕 第1号溝状遺構出土遺物 (No. 3)



〔5〕 第1号溝状遺構出土遺物 (No. 4)



〔1〕第1号溝状遺構出土遺物 (No.5)



〔2〕第1号溝状遺構出土遺物 (No.6)



〔3〕第1号溝状遺構出土遺物 (No.7)



〔4〕第1号溝状遺構出土遺物 (No.8)



〔5〕第1号溝状遺構出土遺物 (No.9)



〔6〕第31号住居跡出土遺物 (31 H) (No.2)



〔7〕第31号住居跡出土遺物 (31 H) (No.1)



〔8〕第31号住居跡出土遺物 (31 H) (No.5)

写真図版6



〔1〕 第31号住居跡出土遺物 (31 H) (No.7)



〔2〕 第31号住居跡出土遺物 (31 H) (No.13)



〔3〕 第31号住居跡出土遺物 (31 H) (No.10)



〔4〕 第31号住居跡出土遺物 (31 H) (No.20)



〔5〕 第31号住居跡出土遺物 (31 H) (No.16)



〔6〕 第31号住居跡出土遺物 (31 H) (No.15)

報告書抄録

ふりがな	かんのんまえいせきだい47ちてんはつくつちょうさほうこくしょ							
書 名	観音前遺跡第47地点発掘調査報告書				巻 次			
副 書 名								
シリーズ名	富士見市遺跡調査会調査報告				巻 次	第73集		
編 著 者 名	佐藤一也							
編 集 機 関	富士見市遺跡調査会							
所 在 地	埼玉県富士見市大字鶴馬1873-1 〒354-0021 tel 049-251-2711							
発行年月日	2018年3月31日							
所収遺跡	所 在 地		コード 市町村 遺跡番号		北緯／東経 (日本測地系による)	調査期間	面積	調査原因
観音遺跡 第47地点	大字水子字城ノ下 3063-1		112356	24-044	35° 50′ 24″ 139° 34′ 22″	2016年12月19日～ 2017年1月24日	603.11 m ²	分譲住宅建設
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
観音遺跡 第47地点	集落跡	弥生時代後期～ 古墳時代初頭	堅穴住居跡 7軒 不明遺構 1基		弥生土器、砥石	弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓の可能性 がある不明遺構が確認された。 古墳時代における古墳周溝の可能性のある溝状遺構 が検出された。溝状遺構からは、底面に置かれた状態 ではほぼ完形の土師器坏・壺が9個出土した。 7世紀後葉の堅穴住居跡から、多量の土師器が投棄 された状態で出土した。また、この土師器と共伴して TK－217形式併行の須恵器坏身が出土した。		
		古墳時代	堅穴住居跡 1軒 溝状遺構 1基		土師器			
		平安時代	堅穴住居跡 1軒		須恵器			
		中近世以降	火葬墓 溝跡 1基 2条		陶器			
要 約								
【観音前遺跡第47地点】 観音前遺跡東部に位置する第47地点の発掘調査を実施し、弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴住居跡7軒、古墳時代後期の堅穴住居跡1軒、平安時代の堅穴住居跡1軒が検出された。 弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓の可能性のある不明遺構からは、赤彩された大型の壺が出土した。 古墳時代後期の古墳周溝の可能性のある溝状遺構からは、土師器坏・壺がほぼ完形の状態で底面から出土した。また、隣接して焼土塊や骨粉が検出されたことから、祭祀行為が行われた可能性がある。 古墳時代後期の7世紀代の堅穴住居跡からは、多量の土師器が投棄された状態で出土した。								